

154 Orange Autumn



komasen333

色づく朝

色づき始めた木の葉
眩しそうに見上げる瞳
切り取られた風景はいつかの繰り返し

朝は綺麗だよ 朝焼けがなくても
夜を経ることで研ぎ澄まされているのかもしれない
雨が降っていてもそれは変わらないよ

新しいよ 朝はやはり何かが 全てではないけれど少しずつ決定的に
違うものを取りいれているのかもしれない

朝は静かだよ 爆音に溢れていても
包み込むことを課せられているのかのようだ

行き先のない午前 救いようのないほど長く

抽象的な夢は 水彩画のように淡く

似ている街

失ってきた物を少しでも多く拾い集めに行こう
今日から始まるあてのない旅

空っぽのトランクに寂しさを敷き詰め
懐かしい顔のある街へ

振り返れば手土産物らしいものを持たず
夢中で逃げ出してきたみたい

切なさや悲しみを拭い去るために高速列車
ページをめくり終える暇もない刹那の帰郷

2時間ほどで辿り着ける過去
それでも避けてきた歩み

もう二度と戻れない気がしたあの頃

変わり映えのしない車窓

再開発著しい数年ぶりのホーム

東京らしさに理想を求めてきた駅前

集積された分 街のらしさがあせってしまったようで

合併されても変わらず残る母校
都合よくすべてがそのままとはいかないみたい

なくしていた心を埋めるかけらはかけらのまま
ふとよぎる 忘れかけていた感情

良くも悪くも整えられた街並
相変わらずの笑顔 ばかりではない

色とりどりの形に分れていく
すべてを喜びに変えれるとばかり思っていたわけじゃない

投げ棄てても構わなかったはず

細分化された重みと増えた寂しさを詰め込んだトランクを片手に
見慣れた顔のある元の街へ

チョコと紅茶

くたびれた日常にそっと吹き込み
できない呪縛からほどいてあげる
それが君への使命 僕の糧

じっとなんかしてられない
目の前に憧れがやってきたから
眩しすぎる陽射しに負けない笑顔
誰にも負けない持ち味なのに
どうしてそんなに隠してばかり

甘く遠く 夢を引き連れ
ほろ苦くも爽やかな風の吹く丘へ
踏みにじった指先 時を越え優しく絡ませる
永遠なんてほしくない
思い起こされた擦れ違い
振りほどけない糸なんてほつれたままでいいよ

ダメになる前に撃ち逃げ
僕等は美しくも儂く燃えていく
奏でる指にそっと重ねながら

慎重なニューロン

傀儡でも構わない 導いてくれるなら
それが唯一の思考でした

さよなら以外でここから抜け出したい
それが唯一の意志

旅路の果てに光は溢れていない
たぶん現実は想像を越えられない

始めから繰り返しているんだ エンドロールを
終わりから遡ってみたいんだ やり直せない分

変えるんだ思想という思想を 世界を変えるために
構造を破壊するために変えてしまおう 優しさという殻を

踏み外してもいけないのに足元を見つめてばかりだよ
相変わらずそのことを深く気にしている 心が素敵だよ

生活

頭を抱え込んだ
必死に壊れまいと
誰でもいいから包んでほしかった

流れに委ねた
辛く苦しい日々がそのまま浄化されることを微かに願い

理性はなかった 涙と感情と僅かな背景音に支配された

もう何もいらないと言い切れそうだ この涙をすべて受け流した頃には

強くはなれなくても受容していける 確信したい 流れてきた時の蓄積を

拾い集められここへ来た たぶんその随分前から1人っきりだった

数えきれない闇を越え 灯火のまま泳ぎ辿り着けた一つ

奇跡は事もなげに法則に組み込まれている

信じられない事でも当たり前のように現れる

おそらく意味はある はっきりとしないまま始まっていく

一度はふとよぎる 意義はないのかもしれないと

それでも言い聞かせる 曖昧なまま駆け出していくしかない

どうしようもなく不安になる 求めすぎているのは自分たった1人なのではないかと

そんな時 ページをめくっていく 同じように抱えていることをもう一度確認したいので

曖昧見舞

ぽっかりと浮かぶ雲を眺め何を考えているの？
難しそうな顔しちゃって
打ち明けられたところで気の利いた感嘆詞をあげられないだろうけど
少しはこぼしてみしてほしいよ

信じてほしいとまでは言えない距離感
どっちつかずが心地いい年頃

どうして甘いも苦いも一人で決めるの 一言かけてくれればよかったのに
どうして辛いも悲しいも一人で抱えるの 一言をずっと待っていたのに

しばらくは犯されることのない期間
どこに行くでもなく思いつくまま歩いていける今

未来から逃げたい そんな夢見ている
過去と今を行ったり来たり

どうして喜びもハッピーも顔に出してくれないの 気づいているんでしょ
どうして間違えのない海を睨むの 一言で決めてばかりじゃない

程良い安らぎに包まれている
未来から逃げたい朝を迎えるたび 無力感に包まれていく

真っ青な頂上は物寂しくて 見上げるともっと寂しそうに見えて

拝啓 木枯らし様

抱えきれない感謝

口に出すと重みに欠ける言葉達

書き綴るとキザになる想い

ささやかな約束を木枯らし一号の夜に

さえない僕に与えてくれた

しがない僕を奮い立たせてくれた

本当に感謝しています

木枯らしが迎えた季節が終わるまで
その想いに応えていきたい

クリスマスイルミネーションさえ
霞むくらいの眩さを振りまくよ

剥がした空虚

間違いだらけでも苦笑いを浮かべてくれればOK
言えは言うほど嘘臭く聞こえるかもしれない
だけど信じてほしいんだ今夜は いつもの週末といっしょにしないでくれよ

見つめれば見つめるほど空しさが込み上げてくる
静寂を切り裂けども未来は手繰り寄せれない
よく分かるよ その気持ち しょうがないよ 救いようのない所に居るんだから

運命はきっと楽しそうにもて遊んでいる
黙れば黙るほど形勢は悪くなる シャベればいいんだよ うわ言だろうが寝言同然でも

デンタルでもドングリでも固めてしまえばすべて1つ
歩けば歩くほど 分かれ道は増えていく

越えられない線
それは想像力の産物

夜空の切れ間から響くプロペラ音
理由もなく遠く昔の彼の国を呼び寄せる

届かない想い
それは空想の戯れ

選択肢に支配される人生も悪くないよ
夢見ていたはずだろ？この風景を

壊れかけた椅子
それは空間との調和

高らかに歌い上げろ 誰の目にも届かない場所から
着実に積み上げよう 虎視眈々と

掛け替えのない鎖
それは活動の糧

破れかけた未来さえ 希望にあふれている
今なら言える 今だからきつと言い切れる

そっと ずっと

崩れそうな意識の果てに分かち合えた時代が浮かんでいる
揺さぶられてきた思想とは名ばかりの言葉の綾で相関図

理想主義の趣きを携え敗北の未来へひた走った
消しきれない跡を刻み掻き筆る

すばらしき感情 かよわき信条 最果ての愛が伝えられる深夜
とてもこの世界の景色とは思えないほど 残酷で 鮮やかで

うごめく日々に乗り遅れないように寂しさだけ綺麗に取り除けるなら
孤独も好きになれるかな

少しずつ一歩ずつ彼方へ 手探りの暗闇に溶けてゆく
飛び交う雑音さえ聞き漏らすまいと

筆を握りしめ 見つめてと 掴みかけてはこぼしてきた
傷つけ合っては夢を描き終わりを告げ もっと遠くへと駆けていく姿が鮮やかで

昨日までに大きく手を振り ずっと見ていて感じていて 遠くからでも感じとるから

君じゃなきゃ始まらない ずっと見ていて 考えているよ想像以上に
何が最善なのか何を最優先にするべきなのか

ゆらゆら なびかせよ風 さらさら なびかせよ波

描いた夢 描ききれなかった夢 すべて詰め込んで空へ放つ

ゆっくりと そうゆっくりと

ずっと見ていて信じていて 時を経ても私は受け止めるから

夜明けの食卓

きらびやかな回路 敷設する真夜中過ぎ

2LDK 奥深く 冷たい重低音

書き表せない感情を言葉にする矛盾

月明かりを蹴散らすかのようにライトアップ

暗闇知らず 闇夜知らず

哲学とは何なのかから始まる自己実現

寝転がるホームレス 悪気はないのに隅へ隅へ

ありふれた朝が摩天楼に霞む

喰い散らかす残飯 遅ればせながら収集車

あふれ始めるスクランブル

あの頃が今も続いていたなら 仮定は現実よりも鮮明

飛び出した黄色い太陽 広がる白いキャンバス

手馴れた手つきで揺らし とれかけのまぶた 精一杯くっつけて

傷つけてしまった面影 取り戻せはしないけれど

今朝も眠気覚ましで 小さくとも重い太陽をいただきます

普遍性概略

多様性って何なんだろう

僕にとっての正論 それは君にとっての暴論

核心に充ちた想い 取り返しのつかない行動 全てがつながりを持ち囲い込んでいく

場の空気を壊さない程度に活性化する一言 言えたらいいな

言えるような人になりたいな

滑りながらも穏やかな陽射しに誘われ 永遠に近い刹那に耽る

運命に近い瞬間を数え 振り落とされぬようしがみつく

少なくとも無駄ではなかった ゆっくりと言い聞かせなだめる

大抵一言は空気を悪くする よく分かっている みんな分かり過ぎている

時間がないと決めるのは自分自身 時間はある 持て余すほど 少し振り返るだけでよく分かる

流れを左右する一言 流れをせき止める一言

高層の谷間 1人きり座るベンチ 呼びかけられる時まで 見つめる人の波

紙一重のところで歯を食いしばる そつなくこなすには複雑すぎる

少なくとも必要とはされている 大きな光に包み込まれるように 淡い確信にさいなまれる

地球儀を回したところで運命を呼び寄せれるわけじゃない

小学生でもわかっているよ それくらい

それでも回さずにいられない そんな夜だってあってもいい

愛されて 傷つけて 初めて分かり合える
それしか知らない それしかできない

泣きじゃくるように奏でられるリフ 僕は思わず打ちひしがれるばかり
届かないと知っていた それでも手を伸ばさずにはいられなかった

まるで永遠を掴み取るかのように 必要以上に緊張してばかりだったよ
唯一の救いだったんだ その笑顔だけが

描ききれない鮮明

掴みかけては逃げ出してきた後ろ姿　掴みかけては手放してきた郷愁
鼓動に据える革新は未だに揺らいだまま
あなたの声を迎えにいきたくて　夢の続きをつなぎ合わせたくて
覚えているなら今日ここにきてくれる　願い続けてきた　忘れたふりしながら

殺せないものばかり集め　優しさを身につける　矛盾した原理にも真理は隠されている
博士は自信なく呟いた

祈りに近い思いが芽生えていた　隔離されたオアシス
崩しては器用にトレンドに溶け込ませていく

無機質な鮮やかさ　限界を超え続ける摩天楼
あぶりだすよ　使命なんだ

錆びついた太陽と降りしきる主旋律
逃れられない迷惑に進んで迷い込んでいく
言い聞かせるしかないんだ　我が物顔で切り込め雑踏

前進を伴う心意気　掲げ始めるありきたりな今日
愛を叫ぼう　明らかに足りないんだ　旅立つには早すぎる
愛を叫ぼう　食傷気味になるくらい　飛び立ったところで急降下は避けられそうにない

巧みに華麗に翻弄　予定は奪われ　されるがまま

最後のドアは音も立てず忍び寄る 遅いよ 振り返るときはいつだって
ため息つかなくても表情でよくわかるよ 黙らせたのは紛れもない
どんなにあがいても涼しげに佇むばかり 悔しいよ 揺さぶりたくて仕方がないのに

一言では描ききれないlove そっと優しく口づけを
永遠と出会えなくなるような予感を滲ませながら

不器用に向かい合った 今いち冴えない表情が2つ

笑いかけた僕にとまどう君
僕がとまどえば 微笑んでくれる？

澄み切った青を見上げる午前 可能性の渦が西の彼方によぎる
単調な予告を告げる明日が東の彼方に漂う

変化の乏しい迷路の中で残り時間を地図をなくして消化
秋の風の中 飛ぶトンボに優しく語る
どこに行きたいのかわからない もう明日にときめかない
どうすればいいのかわからない 昨日の積み重ねを繰り返している

意味があるのかなのか2択ならば「ある」と答えるしかない日常
「ない」と答える権利はあると言われるが言わずもがなと暗黙の了解を強要される

憧れは明確なのに方法論を掴みにいく勇気を持たずに過ごしている
遅すぎることはないと言いつ聞かせたところで夢は夢物語のまま
変えれない過去に捕らわれたまま

洩り出される未来 欠片に託された無数の光
針に触れようとする仕草 それは中枢を握るようにも見える

どんなに遠く投げられても どんなに深く掠れても 美しさは永遠に

時よ流れてしまえ 願い続けた9月の2限
屋上に駆け上り 仰向けで抱きしめた秋空
浮遊する 手を広げ 滑空するかのよう

最果てがあるのなら今すぐ飛んでいきたい
辿り着ける確証があるのなら歩いてでもいきたい
始まりも終わりもない世界に

かよわさ

静かに差し込む窓辺にやさしさが満ち始める
何かいい事が今日もある 予感はやかに膨らんでいく
さよならさえ笑顔に 不思議な魔法にかかったみたい
不安で仕方がないから駆け出してみた あてもないまま
だらしのないライフサイクル 望んでもいないうちに朝日は頂上へ

眩しく照らされたパラソル片手に少し大股で歩いていくわ
眩しく射抜いた胸の奥を押さえ焦がれたつもりでそっと寄り添わせて

探していたのは真実ではない 揺れる感情を抑制できる何か
無理のし過ぎが怖くて閉ざしていた たいして何もないことを隠すように俯いていた
夢の欠片はもう遠い昔に捨て去った 拾い集めるには遅すぎる
導かれてみたかった 大きな光に包み込まれるように

どこにも行かないまま行き場所がないとため息 誰にも話しかけないまま居場所がないとあくび

無意識の罪深さに気づいていく成長過程 悲劇にはほど遠く ひきこもりにはまだまだ

寂しさなんて寓話のきっかけ 中途半端に寝癖をつけ 無造作を少し意識

流されまいと自我を閉じ込める 公にそぐわない言動 意図せずに1人に慣れていく

行き場を求めつつ辿り着きたくなかった

さらわれてしまった一步の致命的な遅れ 迷い疲れ行き先さえ蹴散らす

叫ぶような風に吹き飛ばされかけたタンポポ 柔らかくに包み込んでみた
越えられないあの頃が輝きを増していく 越えられない現実が怠惰へ手招き

崩れる事のない未来を手にする できないとしても願いつづける心は枯れない

たとえ消えゆく定めと知りながらも愛を信じ続ける声は途切れない

あきらめてもどれだけあきらめても あきらめきれない譲れない

あきれてもいい 叫び続けれる限り

ひらひらと舞い散るのならば せめてその刹那を静かに見届けていたい

ジグザグ ジグザグ

最終コーナー 闇に葬られた

何をしたっていうんだ しっかりと繋いでいたじゃないか

裏切り以外の何ものでもない 否はすべてお前にある

言い切ってしまった 言い切らずにいられなかった

ジグザグ どこまでも ジグザグ

くり返し ジグザグ くり返し

止まることを知らない日々

無性に死にたい 価値が見出せなくなった午後

救いようのないところまで流れてきてしまった

間違っ場所にいる それだけははっきりしている

もう戻れないと言いながら積み重ねてきてしまった歳月

あの日から終幕に夢見てきた 僕はダメだ 救いようのないほど

立ち上がれない 立ち上がったまま溜め息をつく どうすればいいのか

走り出す意味を見失った

ジグザグ ジグザグ どこまでもどこまでも

くり返しくり返し ジグザグ ジグザグ

事実を矮小化 歳月を抽象化 忘れないために核心を

嘆く 気づくまで 叫ぶ 振り向くまで

しぶとさでねじ伏せる

軽やかに跳びはねる過去

ジグザグ どこまでも ジグザグ いつまでも

くり返し ジグザグ くり返し ジグザグ

のどかな休日 ありふれた話題でも盛り上がってしまう
太陽がさんさんと降り注いでくれるなら空も海も1つに感じられる

重なり合う事のない夢と現実 頼りにならない過去を引き連れ 遥か未来に潜り込む
消え入りそうな声で確かに伝えようとしてくれたこと
気づかないふりでごまかしたことを悔やんでいる
伝えていきたいんだ 声の続く限り 広めていきたいんだ 夢が続く限り

夢幻を体現するのが夢
永遠なんて今日にはない 果てしない憧れに耽っていたい
最後に言ってほしかったのは「さよなら」だったのに
笑顔で含みを残してくれた 振り払えない輝き 取り戻すまで充電

きっと滅びはしない 思考停止しない限り
最悪なのは自分自身 他の誰でもない ゆっくりと力強く運命を奏でる
戻らないときから得られる色彩 あせることのない感性を身にまとう

いくら奏でたところで戻らないとき以外は色づかない
響かない 響かせない 響かせる前に答えは揃っていたあの頃も
昨日のように無邪気にかき乱していく

絶対に掴みとれない だから追い求める甲斐がある
追いかければ追いかけるほど霞んでいくようで それがまたいじらしくて
どうせならあげられないだろうけど 少し信じてみて
そうすれば枯れかけたこの身体に流れる水も勢いづくかも

ここまで来よう 目を上げてみよう 転んだら手を差し伸べるよ
どうせ期待してないんだろ なら少しは信じてみて

寂しくて仕方がないけど集団行動はやっぱり苦手
一人きりでどこまで行けるか そのための孤独だとすれば何も恐がらなくていい
枯れかけた水にも潤いはまだ残っているんだよ

崩れ落ちた秒針 1つ 2つ 3つ 拾い集める夜 1人きりの部屋
未来さえ撃ち抜いてしまえ 恐くはないさ 明日になれば全てはあの頃

そこまでゆこう 流れてみよう 泳げなくても運んでゆくよ

歩道橋に沈んだ

とりつかれた夜は救いようのないほど長すぎる
朝を確かに迎えてみたくて 重い瞼をこすりひとり言並べた

やがて閉じ始める世界に吸い込まれることができるなら
こんな不安をせずに済んだかもしれない 思い出しかけの思い出が弛緩をしばらく鈍らせる

切られたシャッターに呼び起こされる 戻れない時を重ねながら積み重ねるセツナ
解き放たれぬように必死に塞ぎ続ける 遅れてばかりだ何をするにも

キザで生意気だったあの頃 未来なんて過去と変わらない
投げ出したフリでこなしていた日々 断たれた絆は紛れもなく自分自身の言動の蓄積
巻き戻しのきかない回路 再生を繰り返す情景 迷いをすべて振り払えたらいいのに

叶わない願望を口走り 沈む太陽と人の群れを眺めた歩道橋の中央で
永遠が欲しかった 一瞬さえ抱きしめることができなかつたあの頃
唯一のものが欲しかった 成功への過程さえ溢れすぎていた時代
時間が欲しかった あがき疲れてからとことん究めてみたかつたあの頃
術が欲しかった 器用に通り擦れ違う彼女を越えるような
街角で偶然出会った彼を惹きとめておけるような

何か足りないと何かを求めていた はっきりしないまま流され迷いつづけ
芯に深く据えるような羅針盤を手に入れられるまでずっとこんな気分はつづく

高く遠くへ羽ばたくために我慢しなければならないことは多く
高ぶる鼓動と人見知りの狭間で沈黙を選んできた
押し殺した行為の裏で肥大する想像 眠れる才能をイメージの中でもて遊び

現実とは儚いと寂しさをごまかすように帰宅の途に着く

さすらいんぐ

快晴空なのに心は重く沈む 確変告げる風音は遙か彼方

後にも先にも覚めない白昼夢

どれほど傷つけたところで革命には程遠く どれほど嘆いたところで救済には程遠く

更生とは何かという問いが自己確立に及ぼす影響は計り知れず

震えている 何に怖れているのかさえわからぬまま

叫んでいる 戻らない時の奥底で

呼んでいる 必要とされたいと願う心

愛している 抱き寄せることもできないけれど

咲かないでいつまでも 壊れそうな打ちのめしたいと願う感情が芽生える

どこから来てどこへ行くのだろうか 感情と精度を分かっ こぼれそうなドア

舞い落ちる気配

ある晴れた青の下で小さな幸せを感じていた

それは何気なくあっという間に浮かび消えていった

秋を象徴するようなメロディーライン

涙と呼応するかのように優しく響いた

何もかも1人きりで済ましてきた

強がることも弱気になることもできぬまま

かじかんだ手は温もりを知るために

それなりに満たされていた そのはずだった

灰色の空は愛を芽生えさせるために

でも結局は満たされすぎていた

冬の気配は秋にそっと溶けこんで

少しでも遠くへ 誰よりも遠くへ

解けない謎がふとしたきっかけで明かされる

胸は高鳴るばかりで 心はいつも通りの平常心

捉えかけたさよならはさよならに変わりなく ただただ終末へ

繰り返してきた風景なのに見飽きることはいつまでもない

それは終わりを重ねて考えさせてくれる

前のめり

切り裂いてでも手に入れたいものがある
紛れもないのに 逃げてゆくのはあの頃のままでの心
打ちのめしてくれないかい あきらめるほどに
つまずきかけてばかり ちゃんと転んだ記憶がない

不思議なくらい夢にばかり耽っている
感嘆詞をどれだけ並べても表せない心
途切れないように ただ祈り続けることしかできずに

接続詞のように そつなくつなぎとめてきた半生
思い出さえ残せず消えてしまったよね
気づけなかった僕をどうか許してほしい
果てしなく続くと思われた景色がモノクロへ

何一つ満たされず立ちすくんだ昼下がりに
この瞬間から抜け出すことを願い
未だに変わり映えのしない風景に甘んじている
おそらく幸せすぎたのだろう
何もかもがひれ伏す日が来ると信じていた

恵まれすぎた少年期
没頭することもグレることもできなかった
「無気力」の典型みたいな性格だった

マネキンにもなれないピエロ

セールスマイルが悲しく揺れる

死んでしまった瞳に優しく火を灯し
ブレーキランプのような光を差し込んで

すべてを受容できるように 少しでも柔軟な心を 手繰り寄せてみせるさ
少しでも破壊するために すべてを捉える指先を 再会の季節までに

ざっくばらんに 嫌になっちゃうくらい 軽やかに 自分がわからなくなるくらい
永遠の先まで導いてゆく

後悔なんてさせない するつもりさえないよ
くすぶり続ける 縮れてしまった隅まで丁寧に繕うよ
耳を必死で押さえた時から世界は拡がり始めた

振り払え 降りしきる情報に流されぬよう
取り払え 信じられないことは認識で留めたままで
邪魔にだけはならぬように

描くしかない すぐに街に繰り出しては経験値を求め
振り向かせるために扉を高らかにブチ破ろう

重ならなくてもいい 選ばれし者 告げられ 言い聞かせ
そっと抱き寄せれるものなら 迷いを自身へと変えていく

歩いてでも走っても立ち止まるな
永遠の前で足踏みとはよくできたストーリー

前進でも後進でも 寄り道でも休息でも
動き続けることだけは忘れずに

星々の海へ

夜空に散らばる星達 今夜こそ1つずつ掴みに出かけよう
そう明日じゃなく よく晴れた今夜こそゆこう

流してきた涙を思い浮かべながら

飾り立てた胸に昨夜の星屑を散りばめ 遥かな君に捧げるよ
願っても祈っても叶わない そんな現実を少しでも緩ませてあげたい

1人きりの力で 1人きりから生まれるアイデアで

現実を夢にするのは困難でも 現実に夢を近づけるのはそれほど難しくない

それだけを証明したい ただそれだけを

気づきはしない存在だけど 何もしてやれないけれど

見続けているよ 泣きやむ瞬間まで 眠りがちらつくまで

夜空にぽっかりと浮かぶお月様

空を駆けていく流れ星

夜通し微かに呟くお星様

そんなロマンチックなところにはいない いれない存在だけれど

見守っているよ 朝を迎えるまで 眠りから覚める瞬間まで

射し込ませ

やけくそになって机を叩くと隣で憐れむような顔が浮かんだ
関係ないだろう 怒鳴ることもできたけどそれは違うと思いとどまった

社会は不安定 できる限りで精一杯 充分すぎるぜ
不安定じゃなきゃ成立しないんだ

優しく穏やかな雨の朝 すっきりした心が雨と共鳴
あきらめじゃなく 投げやりでもない
ただ側で感じとれる息づかいを 安らかに聴き続けるために
何ができるかを前提に思考は回っていく

大きな声で何かを発表するのは苦手 だから声をすぼめて背中を丸めるようになったよ
青々とした並木道で揺られながら 静かに眺める帰り道
自信はなかったけれど根拠のない勇気が芯にあった

海を見ても「綺麗」と口に出したことはない あまりにも軽薄な気がしたんだ
誰にも好かれない 気にかけてもらえない
皆の笑い声の中でそんなことを感じていた

止まることなくどこまでも連れて行ってほしい そんなことばかり考えていた
寂しげな生い立ちが欲しかった 逆境さえあればどこまでも飛んでいける

着飾りながら誘うよ 上辺の心に的を絞り
自分の立場に置き換え 必要悪に必要罰を下す構造

TVのストーリーを鵜呑みにしていた 共鳴したふりを通して満たされていく
もし正義と悪が明確に色分けできるのなら 神の代弁者らしくなれるのだろう

そびえ立つ運命はいつの日かの自分自身
鏡のように立ち塞がり 前は暗闇に覆われる

すごくキレイ 光のない場所 すごく整然 月明かりのない湖
交わしきれない夜は明日を引き延ばす やむなく休日のように

痛いほどよくわかっていたよ その思い その視線 今の僕はまだ惹きつけられているのかな
輝き続けるよ 会える日まで

紳士ぶり ギコチナク席を譲るのは自己陶醉の予兆
視線と幾多の心を気にしてばかり

空気澄んだ朝 アスファルトを1歩1歩踏みしめる
無機質とも寂しさとも形容できそうな感触 眩い光に奪われたまま過ごしてきた日々
そこに辿り着くためには何をすべきか 思考は動き出した

Someday,I want to reach to the top which you never reach

蒸す陽だまり

食い入るように練りこむ感情 あがき疲れたイデオロギー
さよならさえ言えないまま 別れのときを待ちわびる

踏み出す勇気がほしい そんなことばかり呟いては眠りについたあの夜
一筆で描いてきた夢らしきものは現実に即したようで

「会いたかった」心の底から言いたかった想い
10月はまだまだ暑い ごまかせないんだ

駆けずり回る夜光虫 ほとぼしる汗を拭い さよならの呼ぶ方へ
いつか きっといつか 僕等はなんで繰り返すのだろう

「待って」一言言えればよかった
イマイチ綺麗に駆け抜けることに不器用になっている

木々を燃やすようにとどろく風 なぎ倒されまいと踊る木々
飛ばされないように身を優しく寄せ合い逃げてきた

自暴自棄でも時は一分も待ってくれない 切ないほどにたそがれていく海極

壊れそうでも中々壊われない まだまだ行けてしまう
それほど能天気にはいられないまま

夏を想いおこさせるように蒸し暑い陽だまり

メガネを置かせて

丁寧に翻弄して頂戴 不器用なくらい震えるの

永遠なんてあり得ないけど貴方といると信じてみてもいいと思えるの

笑わないでよ せっかく振り絞っているんだから

眼鏡を外すと何もかもが曖昧 色彩も 形状も 書いてくれた文字さえも

ただその笑顔と声を引き出したくて ここまで連れてきたの

イメージ通りの景色の中で期待通りの笑顔と声

ありがとう 憎らしいほど ありがとう 切ないくらい

滲ませてあげる 涙に私の色を

最も心地よい現状

カジュアルに付き合いたい できることなら今までみたいに

くだらないことばかりだよ ホント unnecessaryなものばかりだよ

でも手放すことはできないんだよ

叶いはしない暮らしらしきものを挙げ困らせる

秒針片手に来るべき時を待ちわびる そんな奴ほど無駄に生かされつづけ

不敵な笑みに揺れているよ 隠しきれないやましい空想

神様さえいなすように君は君らしく微笑んでみせる

崩れるほど抱き寄せ 時の概念を優しく変えていく

唇を閉じにこやかに 君にとっての理想を僕にとっての理想に近づける

操れるよきっと 泣きじゃくった日々さえ愛せる

あくびを噛み殺しながら一階へ降りてくる まるで兄弟を見ているような感覚

かけらのままで完璧を夢見続ける その笑みの真意に惑わされる

いつまでも続けられたらどれほど素敵だろう

触れてみたい今すぐに 目の前でぶちまけてみたい

勇気がなくてもその声があれば突き抜けてゆける
たとえ過ちに進むとしても

純

恥ずかしいよ 照れくさいよ
気軽なおしゃべりなんてできるわけないよ

病的だよ この部屋だけ
決定的に違うんだ 空気が 想いが

ごまかしきれない自信のなさ
思い描いては掻き消して 思い返しては書き換えて

果たせなかったストーリーを 未だに耽っているよ
ささやかな祈りさえ空しくから回る

心は現実を少しずつ受け止め 忘れられない事さえ忘れようと努める

秋の夜長を切り裂くように耽溺

奏でていくしかないよ 君の手がかりを掴む時まで
才能が枯れ果てていく そんな味わいを噛み締めつつ

キラキラ眩しいね いつだって
振り舞いてやまない 意識すら感じられない心

近づきたいよ 君のすぐ側に 声をかけたいよ 今すぐに
心は行動と上手く結びつかないから苦しい日々は止まらないよ

理屈抜きに打算抜きでおしゃべりできなかった

素直になることを失ったまま辿り着いてしまった

描いていくしかないよ 君の面影を振り切る日まで
真っ白に街を色づけれるなら・・・ とっくに僕は汚れてしまっているけれど

美しいよ 懐かしいよ そのままでいい
思う存分 泣きじゃくる夜 見つめている こっそりと
大好きでしたあの頃 忘れかけていた言葉がよぎる

描いてきたのは幻想ばかり 見向きもしなかった現実達
もう一度にかけていこう 大きな声で
とりあえず振り向いてから 後は考えよう

しがない 響かないメロディー どう形容しよう
ことばが溢れてくるのに 僕に書けるのは限られている
醸し出していくよ 届かなくても

届いて欲しいのはもちろん 声になるまではまだまだだよ

切なくても歩いていくよ 会えなくても進んでゆくよ

全てはいつか出会う「キミのために」につながっている

回想畑

消えてしまった なぜまだここまで見ているの
生かされる意義が見つからない畑
夢を描くほどの才能がない そんな口癖でごまかす

雨降りの平日は物悲しい 沈む気分は雨へ深く浸透
進めず立ちすくんでばかり それでも君は戻らない
理解できていたはずだった

深緑を睨み続けても幻想は微笑もうとはしない
儂く 続き 遠くへ

雨降りの休日は憧憬 傘の下で2人並んで歩いた帰り道
そよぎ立つ水面に揺れる 笑みがあまりにも悲しそうで

どうしてだろう あの時そっと声をかけるべきだった
つまらない日常に刺激を与え損ねたんだ

何気ない一言が綺麗で照れ隠しに俯いている
避けられない運命
どこにも逃げるつもりはない 逃げれる場所もない

快樂の果てに君は微笑んで佇むばかり 声さえ聞かせてくれない

忙しい朝

思い出に捧げるよ 時間の足りない朝は やけに充実した気分
特別な予定がなくても心は弾む

最後に出会ったのが君でよかった 途切れない思い出にしてくれたから

声さえも視線さえも合わせられない 吞まれてしまう映像ばかり気にかけていたんだ

艶やかに頬杖する横顔を気につけない様子でさり気なく見つめたときから
心は脆く揺らいでいた

愛とは何でしょう 答えは色々挙げられるでしょう
求めているのはそんなものじゃない

ふと思いがけないタイミング 見かけてしまった昼過ぎ

そんなつもりはなかったのに とまどいの苦笑い
視線を交わさないように僕はただ足早に

それでも擦れ違いざま その笑顔に引き寄せられた

可愛いよ 何度見ても 可愛いよ ほんといつみても

ぎこちなくさせたのは僕の言動 声をかけられなくしたのは僕の言動

友達と呼べる関係だから 自信がないから

秋空はなぜに雲を寄せつけないのか アクセントはいらないということかな

色鮮やかな光が街中にあふれていく

どこかで今も変わらず

あの笑顔をふりまいていてくれると思うだけで 今日に進んでゆける

雷命

雷鳴とどろく 運命を感じる 夢見る刹那

大きなひずみが暴かれた朝 真っ黒な夢を見た 僕等は立ちすくんだ

雨は小雨のまま 温もりを呼び寄せる

重ねたリンゴ 崩しあった昼下がり

奇跡のキスで分かち合いましょう

揺らめくための瞳ならば 思う存分 潤してもいいんだよ

すばらしき日々を色づけてかき消してみたいな
いつかきっと叶えてみせるよ 自分自身のために

人込みが嫌いというから逃げ続けてきた

後ろ向きのおを育みましょう 胡散臭いフレーズで

少し あと少しで会える 運命を待ち望んでいない 夢見ることはあったとしても

沈んだ希望を掘り起こすためにこの腕がある 思えば少しは強くなる
すすり泣き 手を握り歩いた夕暮れの帰り道

景色の果てへ2人きりで駆け抜ける

色づけていける 君となら 曖昧なディテールで塗り返してみたい

抱きしめてほしくないから 抱きしめてほしい

かなぐり捨てるんだ 昨日さえも
途切れてしまうその日まで

くゆりさん

飛び散らかしたクッション 1人片づける真夜中
古傷が急に痛みだす

ゆっくり走りなさい 憧れのあの子と仲良く話す夢

時代が求めた 潜在的なスローガン

ゆっくりに忠実でいなさい 大きな黒い影に怯える夢

仕組まれたトレンドに満足できそう

さげすみなさい 運命さえ軽やかにいなし

素直に趣くままに

願っても叶わない真夜中 積み上げてきた何気ない日々
愛しくて泣き出しそう

かさぶた破れかけ 剥がしそこねた

やさしさだけくゆり 君はいつもくゆり

踊れないと呟く手を 優しく誘う

深層心理曲線

ナイスな心意気
褒められたのかな 貶されたのかな
ひらひらと舞い降りる夢の先の景色は既にモノクロ

枯れない夢を見ましょう
遠慮ばかり体に馴染んでいきます
あきらめるように心をいなすかのように 情報がしめつけてゆく現実

咲かない夢なんてないんです
言い切ってしまうコミュニティ
現実を塗り替えたいと願う心はありえない想像をまき散らし自己完結

思わぬ一言に愕然とする底辺 楽にはなれない
でも回想 それでも夢見てやまない

降りしきる午前と午後の境目 そろそろお昼にしなくちゃ
誰もいない場所で優しく自分を励ましてみる

追い込むよ 自分が嫌いだから 走り出せない心を奮い立たせたい

届かない 戻らない風景が胸をよぎるたびに 素直にできなくなった今にうな垂れる

どうすればいいんですか？ 奥底に投げかける 渴いた音に空しさを覚えた

罵声も暴力も響かない 何かが欠けてしまっている
何もできないまま 何かができるフリが上手くなっていく

それでもくすぶり続ける あの映像に魅せられたまま
このままじゃ進めない 朽ちることさえできない

落ち着けよ 言いながら自分をなだめていた 奇跡よ 早く訪れてくれよ
待ちわびているんだ うつむきながら

飛んでいってしまえ車窓の景色のように 仲良しのまま消えてみたい
ねえ そんなに悲しまないで ねえ そんなに落ち込まないで

いつかの白昼夢みたいに抱きしめあう 今でも
遠回りしながら繋ぎ合わせてゆく

抱きしめあう 未だに 譲れない限界曲線
抱きしめあう 夢の中 外れない軌道曲線

君は君らしく消えて行ってほしい

解き放ってくれないか 天地を切り開いた日のように
術が見当たらないんだ 奥深く照らしてはいるのに

ベッドで並んで寝たあの日
手を重ね 語り明かした 本能より前に夢が溢れていた

気づいてくれた 気づかせてくれた そんなやりとりが当たり前だった

傷つきやすい性質 あきらめやすい性分

引っ張り上げてくれるイメージを1人きりの部屋で夢想

終わりに近づきながら生き生きと延びていく光景に恋をした
意外なほどシンプルに落ちていった

ずっとずっと 祈り続け きっときっと 願い続け
奇跡に近いことを密かに期待する すべては自分にかかっている

よくわかっているつもり

周囲に埋め尽くした花びら

なくしたのは君じゃない 僕自身

明日へと続くのはどうでもいい単調

賑やかな群れに背を向け

1人透明な手で耳を塞いだ数年

和やかな声に必要以上に警戒心を覚え

ぎこちのない笑みで切り抜けてきた半生

憐れな末路をぶれることなく歩んでいる

枯れかけの水彩画は いつの日かの予言

残響すこやか

しゃがみうなだれたあの日が懐かしく思える
そんな場所に立つようになった

一人では何1つできないことを気にして泣いていた

囲まれた午後1時過ぎ　少し蒸し暑く　苛立ちを覚えていた

廃屋同然のこの街で希望を持つとは死に等しい

ささやかな親切　余計なことはするなと冷めた視線

枯れかけた花束でも喜んでくれる　理由もなく自信があふれる

捧げられるものはすべて　お前だけがくっきりしている

そびえるビル郡　遠い日の午後のおもちゃ売り場が霞む

終わった午後2時過ぎ　足早に帰宅の途に着こうとしていた

吐き出す熱気　こぼれるため息　さよならさえ美しく　その歌声に聞き惚れていく

あんなに耳障りだった声が

とても愛しくて切なくて仕方がない今があるよ

荒んで映る過去をかき消すぐらい 今日という日を疾走

久々の中指

辿り着けてはいない 未だに
お前はどんな表情で蔑むのだろう
何一つ捨てきれしていない あきれて踵を返すのだろうか

ざらつく公園の隅が居場所だった 唯一の
気軽に世間話とはとてもいかなかった
朝も夜も大して変わらなかった しみるような寒さを除いて

はみ出すことが汚らわしく まともなことが健全と規定されたのはいつからなんだろう

転がした2次方程式 理解もせずに解けてしまう不条理
やりきれなくともこなすしかない

危なげのない橋を選んで渡りきってきた 誇らしく振舞える神経を苦々しく見つめていた
大声で間違っていると言える勇気と知識を求め嚙り付いた

真夜中 目覚めた 流し堪えてきたものがふいにあふれてきた

どんな夢なのかよく覚えていない

たしか自分がどれほどふがない人間であるか突きつけられたような感じだった

たぶんその世界を覗いてしまった

踊り狂う日々は遠く強く息づいている

まばらにも黄色い帽子が映える列 遠い昔に居た自分をそこに重ね合わせた

戻らない時の中 今を漂う

笑わせるなよ未来 迎えてもいないのに怯えさせるなよ

おしゃれなまま

かりそめでしかない表情 信じるか信じないかの選択肢を振られ
焦り 途惑いをひた隠す
入り組んだ専門領域に無関心なまま切り込む

壁沿いに歩く日々 吐き出す寸前 喉を切り裂く
黄色を赤色でごまかすかのように

何もできないまま 生きがいを求め始めてしまっている
咲くことも飛ばされることもなく無風の白い空間で

文句のつけようのない微笑 放たれる寸前
夢中で握る 絶頂の余韻に浸るように

潜りたいな その瞳の奥まで
何で声をかけちゃったんだろう 後悔は未だ消えない

探りたいな その唇の奥深く
毎日その笑みを眺めるたびに叶わぬ想いにしめつけられる
永遠といかなくとも過ぎ去ることのない想い

通り過ぎてくれる君に視線を送り つなぎとめる自分に嫌気が差す
どれほど巡れど気づいてはくれない それでも構わなかった

自信をなくしたまま 変わらない朝を繰り返した
戻れるならなんだってできるのに 見果てぬ夢の輝きに捕らわれたまま身動きさえできず

儂さ畳み

たぶん終わりなどないのだろう

始まりの時から何となくわかっていたよ 教わった記憶はないから

扉の奥から聴こえるのは幼き自声 こらえきれず嗚咽を漏らす

- イタミジャナイ コレハイタミナンカジャナイ -

言い聞かせては閉じていく日々

悲しみがそっと落ちていく 呼応するかのようには頬を伝う喜び

だらしなく風に揺れる下着 1つ1つ放り込む放課後

そつなくこなせる 見せ掛けの自信が唯一の取り柄だった

独占欲に駆られ 縛り上げることに明け暮れた日々は嘘みたいに霞んでいった

時間じゃなく言い訳がほしかった それなりにごまかせるように

振り返るために現在はある

疲れを際立たせるかのようには過去が高らかに嘲笑う

静かな部屋で分かち合えたつながり

触れなくても満たされた思い出

くだらなかつた積み重ねさえ
味わい深いセピアとなっている

優しくも儚げな佇まい 本能は理性を踏みにじる
明日にでも消えてしまいそうな脆さを称えている

滅びてしまったのは心 ささやいているのは頭

季節は放っておいても流れていく

感情だけを綺麗に残し

向こう岸へエッセンス

奇跡が途切れかけている 目の当たりにした木漏れ日の下

少しでも遠くへと続くようなエッセンスを持ち合わせていたい

お花畑

それは憧れのドライブコース

貴方にとっては退屈な 私にとっては楽しみな日帰り

ぶつつぶしてくれても構いません 貴方なら

何をなされても大目に見ましょう 激しく怒る姿もキュートで胸が痛みます

焦げきったパンでもきれいにたいらげます だって貴方が作ってくださったんだから

泣き顔も見せてよ 笑顔だけじゃなくて

さよならだけでは寂しすぎるから
せめてここで見つめさせて

怯えた表情さえも輝かしてみせるよ
太陽になりたい いつまでも枯れる事のないような

さよならが似合わないように明日へと駆け出していく
小さく大きく見せたくて

離れ離れの果てへ来ても信じ続けていたいよね
崩れ落ち次第駆けつけるよ

宿命という言葉にしたとたん空虚

波間に運命が泳いでいる

試作量産体制

時間という揺りかごに踊らされている

気づいてはいる 時代も人も 1人きりでは切り開きにくい

それが人生 それが社会

覚えきれない単語 がむしゃらに書き殴り

死を念頭に置いた夕暮れ 懐かしき人の死を知らされた 己の未熟さを恥じている

辿りつけない歴史の十字路 切り取られていく史実 書き加えられていく思想

秒針との追いかっこ 飽きたふりでシカトを決め込んでも

残酷に胸を締め付ける この想い

落ちるだけが取り柄 悲しいことなんて何一つない

いつもどおりの週末だった そのはずだった

それでも夜は涙を欲した 目覚めを引き裂くほどの夢を連れてきた

夢の中では心の中がすべて見透かされていた 怖いくらいに知ることになった本性

自分自身が隠してきた気づくことのなかった裏側

振り落とされぬようあがき続ける

撃ち抜いてしまえば楽になれる 答えは明快だ

たいして変わらない今日と昨日 単調に耽っている

流されていく無常に救いの術は現実感を取り戻す

途切れない絶望に優しく微笑む 気取らない運命に夢を託す

器用にそつなく渡りきる 君達とは住む世界が違う

おそらく努力の質が違うんだろう 気力が湧かないんだ

自分でも信じられないほど 言い訳にしか聞こえないだろうけど

感傷主義の渦中

愛すべき人は気づいた時にはもういない
なぜなんだ 気づいたときに限ってこんな風なんだ

高く飛びたい 僕はここにいるよって
元気よく伝えたい いっぱい迷惑かけたけど
ここにいるんだよ 気づいてほしいよって

空は綺麗過ぎて僕は後ろめたくなる

ああ才能が欲しいよ 振り向かせてみせるような

凍えそうに座り込んでいたね
優しく声をかけるつもりでかけそびれたあの日

今も後悔しているんだ 心の奥深くささくれみたいに残っているんだ

思い出の曲が胸に染みるよ

戻せない過去 戻らないあの心

「ありがとう」 その一言を言えなかったことがひっかかっている

進んできたつもりなんだけど 実際はどうなんだろう よくわからないよ

涙が今さら零れ落ちてきたよ 4年前に忘れてきた心が蘇る

実際どうなんだろう 今も素直にはなりきれていないんだ

ああ 戻りたいよもう一度 あの頃へ

たくさん話しておけばよかったのに僕は素直になれず
照れてばかりでちゃんと見つめることもなおざりにしていたんだね ずっと

ああ 戻りたいよ だから今は叫ばせて

ああ 戻りたいよ 戻れなくても願わずにいられない

月に添える虹

うごめく激情 翻弄される感情 揺るぎない契りを誓う
君の駅へ来たよ 思わずにはちょっと出来過ぎているかも
それでも視線はその淡い輪郭を慌てて探す
欠片でいい 少しだけでも君の近くで雰囲気味わいたい

運命に誘われても今は振り向きたくない それが僕だけの心模様
優しさが込み上げる休日の午後
自信のない僕は相変わらず冴えないキャラで過ごしているよ
君のくれた色彩で身にまとい 今日に飛び込んでいく

ありがとうほんとに相手にしてくれて まともに話せない僕なんかを
進んでいないんだ あの時からずっと 今までの日々は嘘みただった

君のくれた曲を引っ張り出した前日 進路選択なんて似たり寄ったり
どこに行こうがたいした未来は待っていないと すかしてばかりの僕に教えてくれた

あのメロディーと詩

「時間をムダにしちゃだめ」

聞き飽きたフレーズなのに 込み上げてくるものを堪えきれなかった
弾き始めたときにはもうぐしゃぐしゃ

虹色に染め上げられる世界 見惚れていた軽やかなステップ
夢を具現化して見せてくれた 少し嫉妬を禁じえないほど
なりたかった 貴方のように その時から夢を見つづけている気がする 今でも

おもしろいほど広がる世界に溺れたまま
月が照らす海は儚く凜としていて 手の届かない場所を初めて強く意識した

風に舞う点の集散 あきるほどに繰り返された季節に新たな一面が示された
時を止めて記憶を繋ぎ合わせていく 永遠を今の中に形作る

ポスト～

繰り返される歴史の悪夢

捉えどころのない波に法則を見出す定め

最後のドアが開かれ　　あらゆるひずみは終息にまとめられた

再生に向けゆっくりと光を差し込ませ

時間軸を取り戻すため　風を吹き込ませる

better than best

過ちは時を経て気づかれる

遅すぎる溜め息が空しそうに白く揺れる

転がり続ける歴史の解釈

熱しやすい渦に翻弄を促される流れ

再生の庭の陽だまりで分かち合う2つの糸

共有に向けしたたかに手を握り合う

朝焼けの慈悲

優しさ 慈しみ 込められた想い
届かないとしても「伝えたい」が溢れすぎている

流れに流されていても それなりに自我は確立できる
情報はあふれていても 遮断するのはいつだってできる

車窓には懐かしい影 人込みにはいつかの笑顔
追いかけてくるのはあの頃の自分

言えなかった想いは駆け巡り放題で 感傷さえ許してはくれない
にじんだ文字なぞりながら読み取る
歳月を越えた経験が髓の深くまで熱くする

月明かりに照らされ歩む木立 遅れないように羽ばたく小鳥達

焼き払われてしまう明日 郷愁に浸るのは明後日

真新しい朝日は昨日なんてつゆ知らず
無邪気にふてぶてしいくらい注ぎ始めるよ

受け入れてほしい今日こそ
認めてくれなくていい 知覚してくれさえすれば

受け入れてください今日中に
場所が見当たらないままなんです 今日

握り返された掌はあまりにも無感情
それでも喜びは頬を伝っていく

出会えなかった日々は今日で終わる
淡い確信が私の支えとなっていこう

昨日までにさよならを 始まりの今日に感謝を

捧げよう高らかに 捧げさせていただきます 天高く

ショートメール

1人きりの夜は思い出に捧げる
未来を　これから始まる明日へのイメージを

必要以上のことは書かない　短めのメール

だから　少し長めの時は初めて会えた時のようにときめく

いつも壊れない限り　繋がりあいたい

いつの時代も変わらぬ想い　行間に滲ませる
知らない漢字はひらがなのまま　自分なりの誠実がある

2人きりの夜は希望を捧げる
過去に　これから積み重ねる日々に

必要以上のことはいらない　短めのメール

だから　少し長めのときは始めの頃を思い出す

知らないことは知らないまま　自分なりの素直がある

いつの時代も揺るがない想い 行間に滲む

いつまでも壊れない限り 繋がりあえる

オルタナティブ幾何学

やけくそになりながらも約束を果たす
誰に強制されるわけでもなく 振り返ることを禁じた

終われない今日を 終えれない昨日を携えていく
それがこの道の姿なら受け入れていける

たぶんこんなもんじゃない
立ち止まるたび言い聞かせているんだよ
憧れの彼も 小さなヒーローも 著名人も

「走り出してもいないんだろ？」

見透かすかのような一言に驚き 少し嬉しく思っているよ
力強く駆け抜ける途中で さり気なく声を挙げてくれたことに

夢見る意義 答えのない問い 浮かべては掻き消してゆく
とどろくことのない

砕けた記憶を作り直す暇があるなら 腕を振り上げ手探りで掴み取る姿勢を

ロック 誰よりも今夜はロック
飲み干してしまえ 闇夜ごと

感傷に浸るくらいなら切り抜き ひたすら没頭すればごまかせる
やりたいことが見当たらない 退屈な日々はそのまま どこまで行っても僕は僕のまま

ロック 誰よりもお前はロック
掻き鳴らせ騒音も込みで

不安なんだ 失敗する前から失敗した後の気分
どうにもこうにもならないから朝焼けとともにドアを開く

限りない夢を搾り取れ 時間は迫らなくとも限られている
前のめりでゆこうよ 図々しいくらいでもちょうどいいくらいの控え目

落ちそうでも羽ばたいている 飛び立つには心の持ち方を変えろ
幾何学模様の田園地帯 綺麗という言葉ではくくれない

眠れる才能とやらを掘り起こせ ないならあるようなフリで貫き通せ
精密を欠いた抽象画でも描き続ければコレクション

思い出だけでつながりあえる瞬間

手を振ってさよならした未来の手前

奈落の運命だとしても 加速は緩めないで

終生道

何よりも輝くため すべきことは何なのか
教えてほしい そっと囁いてほしい

命ギリギリの淵を泳ぐとしても 恐くはない
退屈の息の根を止めてほしい

泣き叫んで 想い焦がれ
届かぬ切なさ 切れぬ儚さ

散らばる掟 守る由縁に震え
真一文字に精進する志が芽生え

立身の道を切り開くのは己

声なき声を具現化

姿なき思いを夢想

愛なき心を破棄

立ち往生の歳月を幾十年またげども
名もなきままでは切腹できぬ

生涯孤独 一生精進

生涯变身 一生耻辱

生涯放浪 一生一会

窓際の地図

すっきりとした左後部席からの風景には

不可分な行方がこんなにもっていうくらい広がっている

どんよりとした窓側の自由席からの風景には

不可分な行方がこれでもかっていうくらい広がっている

行き場もなく怒ってばかり 理由もなく涙がしたたり落ちる

いつだってこんな風なんだ いったんつまずくと周回遅れ
本当に嫌になるよ 自分の不甲斐なさに やるせない
こんなはずじゃないって繰り返す現在

たぶん笑われるのが嫌なんじゃなくて
笑われる口実を与えるのが嫌なんだって..... 気づいたよ

流れ 生まれ

流れ 倒れ あの時があこの頃のまま 今をしめつける

止めどなく落ちてばかり 理由もなく笑みがこぼれる

あの頃とさほど変わらない未来 受け止めきれない

僕にはムリなんだよ

遠くまで導いてくれないなら 僕が導いてあげられる人にならなきゃ

重ね重ね 逃げ切れなくても駆け出してみるしかないさ

たぶん悲しむのが嫌なんじゃなくて

悲しむ理由を噛み締めるのが嫌なんだって..... 気づいたよ

流れ 生まれ

流れ 倒れ ああの頃がああの頃のまま今をしめつけるのなら しっかりと振り切って

すっきりとした助手席からの風景には

不可分な行方がこんなにもっていうくらい広がっている ...とキミは思う

どんよりとしたバスからの風景には

不可分な行方がこれでもかっていうくらい広がっている.... と僕は1人きり思う

才色る伝染

光を小さく灯し
真夜中に回路を洗いざらい

混線模様の主たる原因である微笑み
1つ1つ丁寧に噛み締めつつ除去

上手く言葉を発せられないまま
遠ざかる姿を見送ること複数回

どれほど数えれば振動するのか
わからないのはあきらめと同義

爆発しかねない夜に想いを揺らす
静寂を越えて時を塞ぐ

自らが仕掛けた罠にまんまと落ちて喚き散らす
知らされない感慨に耽る妄想

会わされた再会は理想に程遠く
踏み潰された自尊心にお別れ

頗るお腹の調子が悪い

響かない思いに溜め息

すやかに楽園に導いてくれないかい

どんなに振り解いても断ち切れない呪縛

歳月に吹きかける

話せない夢を語り明かす

雷鳴に思い起こされる

最後に振込みで逃げ切れ

フライ 彩色美に揺れる

夢路

ささやかな陽だまりの中で 吐息を優しく吹きかけてくれる

可能性をふりまく微笑 夢なら覚めないでと願う

覚えたての感情をわめき散らす

めずらしくもないかもしれないけれど 生まれたての真新しさを伝えたい

か弱き感情に初めて気づいた夜 眠ることさえままならない

これが恋というならどれほど辛いものなのだろう ぎゅっと1人縮こまる

ありふれたことの尊さに気づいた朝 遅すぎた後悔が涙を呼び寄せた

運命の鼓動 僕と君でも重なり合わないタイミング

だから胸に耳を寄せてみる 出来過ぎた口実は思考回路どまり

とまどっているのが役目 そんなに甘くはないけれど

ほんとにそれしか体現できない

それでも鼓動が高鳴りつづける日々は途切れない

夢見る事はすばらしい

年を重ねるごとに何で恥ずかしくなっちゃうんだろう

語ってはいけないっていうきまりでもあるのかな

夢を見つけられないことに悩む必要はない

まだまだひよっこだから言い切るよ

生まれたての朝日を待つとき 瞳をそっとよこしてくれる

予感をささやく声 夢なら夢でいいと確信する

ひと時

寂しさが剥がせたら
冷蔵庫のマグネットのように何気ないものなら

苦しみは減っていくのか　　空しさが増えるだけなのか

量れない感情が今日を掻き乱す

そろりと忍び寄る鼓動　　理由ありの冷たい汗が頬を伝う

愛を感じられない抱擁　　信じきれない告白

色取られた現実は幻想のよう

上手くいえないまま　　言い訳ばかり上手くなる

時に涙を流し　　ふいに とびきりの笑顔に出会う

時に儂さを感じ　　ふいに その短さに震える

喜びがやわらかなら
ソファーに転がるクッションのように何気ないものなら

悲しみを伴わないのか 痛みが和らぐだけなのか

量れない思考が身体中を締めつける

時代は変わり

街はためらいながらも受け入れていく

歳月は変わることはない想いと結びつき

夢は現実と折り合いをつけていく

時に人は悲しみを知り 時に人は自由を知る

時に人は喜びを知り 時に人は孤独を知る

最果てでも 無免許

一体全体どうしてんだろう

僕も君も 嘘みたいにおかしいよ

激戦区を軽やかにいなしていこう 涼しげな微笑はその日までとっておこう

たぶん 作り話じゃ満足できない性分

心の中を巡っていく螺旋

トリッキーは控えて正面突破を図ろう

ゆらめきをきらめきへ変えていく

元気ですよ

誰も聞いていませんよ

元気ですか

こちらのセリフです

どんなに裏ぶれても 見捨てないでくれたね

本当は声にならないほど 嬉しかったんだ

最果てへドライブしよう てらいもなく呟くよね

悔しいけれど いつのまにかハンドルを握っていた

昨日までブランコに揺られていたはずなのに

どんなに暴れても怖くはない 割とミーハーなんだ

だって慣れているから 恥ずかしげもなく言えちゃうよ

さんざめく流星音 聞き漏らさないで今夜は

放り込まれた無重力 次元を突き破ろう

君は綺麗だから

気分は宇宙遊泳の訓練

奪い合い

傷つけあい

進んでいるのか退いているのか
どろだらけの姿で歩いていくよ 道なき道を

夢は夢のまま 心に灯し続けていきたい

最果てを訪ねながら 光りあふれる序章を求めている

たとえ矛盾に満ちた歩みだとしても

志は高く

足取りは軽やかに魅せていきたい

一途な思いに耽ったまま 君と出逢ってしまった

求めすぎたのは僕だった 遅すぎた冷静に浸る

願いは叶うものだと信じていた 恋は輝きにあふれたものだと信じていた

戻れはしない年頃の感性

描き終えても止まらないんだよ たぶん描き足りないんだろう

背中にまで深く長く延びるイズム 書き換えるためにはもう少し時間を

待ちぼうけを食わしてばかりだけど もう少しだけ辛抱してくれないかな

輝きを光に

変えていくのが

こんなに大変な営みとは

まさか知らなかったよ

突き抜けようにも突き詰めなきゃ始まらないよ

気づいているんだね 痛いほど 拭えないくらい

朝が 来る度に 悩んでいる

行くべきか 休むべきか

積極的に奇声を挙げ

要注意人物にいつの間にか仲間入り

照れ隠しにハイテンション

内気なお笑い芸人が ふと見せた眼差しに 似た匂いを感じとった

抱えながら進んでいくしかないさ

スタートラインは不平等極まりないけど

嘆いたところで政策はあてにならず 言わずもがな

こちょこちょでごまかしてもダメなんだよ 明日はきっと止まらないからね

それでもちょちょやめないから少しむかつくよ でも嬉しかったよ

退屈な映画でも見ていられる 横で 真剣な眼差しがあるから

目覚めた時には窓が淡く色づいていた

朝なのか夕方なのか はっきりしない 休日でもないのにこのスタイル

いつの間にか外れていた

どこへ行くのだろう

自分のことが1番良くわからない

他人のことは予測しやすいのに

とにかく恐くて何もできなかった

朝は夜よりも暗く 夜は朝よりも鮮やかで

昨日までブランコに揺られていたはずなのに 今日にはもう 満員電車で揺られている

時の加速は想像以上だよ

愛しても軽蔑もしていない

いなくなると気づけない 欠かせない存在の重み

最果てへの切符を片手に

静かに微笑み踵を返した姿 昨日のことのようによらめいている

いつかその笑顔を受け止めてみせる 輝かしい季節の中で

それまでひたすら駆けずり回るよ

ドレスに浮かぶ水玉はどこか寂しげ

節操のないほど鮮やかに逃げ切る

寂しくなったら呼んでください

駆けつけることはできなくても

つながっていることを忘れずにいてください

バランスの崩れかけた日には 気軽に連絡をください

車はないけれど 出きる限りの手段を駆使します

いつかどこかで

少しくらいのがっかりだもん 明日にはやわらいでいるよ

時さえ止めれそうだよ 勢いだけでどこまで行けるかな

空しささえ感じる隙もないくらい 出会い別れを求め上下の営み

ありったけの武器を掻き集め それぞれが握り締めたら後はひたすら地中へ

海までは遠いけど掘れるとこまで掘ろう 波しぶきが聞こえるまでガムシャラ

そこを越えれば限界をすべて放射

寄せては返す自然のBGM 寄り添うように口笛

咲いてほしい 旅立つ前に どこかで海でも眺めながら

そう 閉じていないで いつか やってくるんだよ

乗り越えてみようよ 1人きりで

山あり谷ありなんてありきたりなこと言うつもりはないけど

笑顔の裏に隠された努力 僕等はそれに見向きもしない

掴みにいかない？

それは 草原の片隅に何気なく生えているのかもしれない

それは 大学図書館の2階に ひっそりと眠っているのかもしれない

それは 住宅街の真ん中にあるバス停に並んでいるのかもしれない

それは 無人駅のベンチに じっと座っているのかもしれない

それは 懐かしの原風景を残す問屋街で売っているのかもしれない

それは 外国小説の中盤に そっと書かれているのかもしれない

それは デパートの6階と7階を結ぶ階段の踊り場に置かれているのかもしれない

それは 赤信号の交差点で ゆったりと佇んでいるのかもしれない

それは 米軍基地に挟まれた幹線道路を走っているのかもしれない

それは あなたの住む近くで 何気なく存在しているのかもしれない

掴みにいこう 目的は後からつけることにして

僕は今でも休日の昼過ぎ

ラジオから流れてくる曲を録音しては
自分の歌のように口ずさんでいる

心地いいことはあの頃と変わらない

才能の違いに打ちひしがれては 励まされていく

知らないメロディーが僕に言葉を与えてくれる

そして言葉は想像以上のメロディーを僕に書かせてくれる

二大政党制

いっぺん委ねてみましょう

ダメもとでいってみましょう

少しは褒めてあげましょう

たまにはいいでしょう

褒めれば伸びるか縮む

どちらにしても何らかの反応は測定されるでしょう

勇気を与えてやりましょう

調子に乗っているなら

いっぺん鼻をへし折りましょう

最終的にはどちらのためにもなるでしょう

いっぺんそっぽ向きましょう

積極的に示してみましょう

少しは冷たくしてあげましょう

たまにはいいでしょう

冷たくすれば伸びるか縮む

どちらにしても何らかの刺激は観測されるでしょう

休息を与えてやりましょう

意気込みがあるなら

いっぺん鼻を高くしてやりましょう

最終的にはどちらのためにもなるでしょう

いちいちやってあげましょう

そうしないと気づかないでしょう

そうしないと気づけないでしょう

そうしないと落ち込んだままでしょう

そうしないとあぐらをかいたままでしょう

めんどくさいものでしょう

世話がやけるものでしょう

まあ そんなものでしょう

空にはいつも

切れ味のいい色が潜んでいて

僕等が落ち込んだときなんか

ひょっこり滲ませてくれる

床なぞり

どうすることもできないまま
知らないまま 僕には何も

知ることもないまま
何もできないまま 僕にはもう

愛せない
その資格がないままここに

愛してはならない
心に深く据えてきた

ひとひら ひとひら
舞い落ちては上がる 風景を
静かに眺めてきた

心が穏やかな時
他人のことなのに
自分のことのように感じられた

心が乱れている時
自分のことなのに
他人のこのように感じられた

そっと微笑むこともできずに
視線を交わさないように
床をなぞってきた

何をすることもないまま
声を挙げることもないまま　　明日には何も

何もできないまま
嘆くこともないまま　　昨日にはもう

そう この瞬間

目覚めた

そして このとき

落ちた

ありきたりすぎて 可笑しかった

自分とは無縁なことだと思っていたのに
案外 とうとつにやってきたよ

あなたは綺麗で

あまりにも速すぎて

ぼくとは正反対

憧れのままで 今も心の中にいる

裂けかけたのは 夢じゃなく

未来でもなく 自分の本性

この頃の夢はありきたり過ぎて

ときめきには程遠くて

口ではカッコつけて

身体はいまいち反応が鈍いままで

どうせ一度なんだから

枯れ果てるまで咲かせてみましょう

つぼみのままで終わるとしても

咲き誇れる日まで居続けましょう

ここからすべてが始まると

刻み込みましょう

振り向いてもらえなくても

気づいてもらえなくても

雑音でも 騒音でも

なりふり構わずわめきましょう

歯がゆいな 伝えたいな

どうして気づいてくれない

僕にもたしかこんな頃があった

それすら忘れた今

じれったい自分勝手に
あふれてくる

なんで伝わらないんだろう

どうすれば気づいてくれるんだろう

歯がゆくて仕方がないな

伝えたくてしょうがないな

僕がもっと口上手なら

僕にもっと才能があったなら

気づいてくれるのかな

気づかせてあげれるのかな

こんなにゆっくと伝えているのに

こんなに聞きやすいようにしゃべっているのに

なんでかな 伝わらないな

気づかないな 気づかせてあげれないな

難しいな 1つだけ伝えたいだけなのに

難しいよ 1つ伝えるだけでも

声が聞こえた また響き始めている
陽炎に揺れるホームで佇む姿
水彩画のように 淡く儂く

思わず1人 見惚れてた

声が聞こえる 6限終わりのざわつく教室
足早に帰るふりしてそのペースに合わせていた
夏期講習のために予備校へ走り
同じ方向に向かう私服姿
いつかの夢のようで

思わず 1人見惚れてた

僕だけの思い出がある
誰も見たことのない キミは想像することしかできない

都合良すぎるほど綺麗でも修正は誰にもできないから
胸の奥をそっと掻きむしると焦がれた感覚は鮮明によみがえる

君だけの思い出がある

誰も見たことのない　ボクは想像することしかできない

どこまで本当なのかわからないけれど

すべては胸の奥でしっかりとしまわれている

才能もないのに嘆いてばかりだ

努力もしないのにすがってばかりだ

崩すぞ今

「今日から変わる」じゃない

今だ 今すぐに片をつけろ

片づけろ 捨てろ

余分なもんはすべて捨てろ

情報は絶対悪だ 現代では

置いていけ

迷うならすべてそのまま置いていけ

必要最小限と必要最低限を叩き込め

刻み込むんじゃない

脳に直接埋め込め

とりあえず向かった浜辺で
さらわれた感情が脈打ち始めた

どこか遠い未来の苦しみを
垣間見せるような空に 貝殻を放つ

どうすればいいのか

どうすることもできないまま
心がしゃがみ込む

どうすればいいのか

まだ問い続けている
心だけしゃがみ込んだまま

聡明な知性を感じさせる瞳は

あの頃と変わらぬ色で認めている

心が立ち上がる日など絶対に来ないことを
まるで始めから知っていたかのように

どうすればいいのか 何もできないまま

心がしゃがみ込み待ちわびている

どうすればいいのか 何も起きないまま

心だけ しゃがみ待ち望んでいる

潮騒の先に雨雲が見え
力強く降り注いでいる

はっきりと見てとれる
空間が切り取られたかのように

どうすればいいのか
喉を求める

どうすればいいのか

心が喉を伝う

どうすればいいのか
声を欲する

軽やかな揺れる太陽光線

絶え間ない時が今日を迎え入れ

果てしない昨日までを鮮やかに縁取る

振り向くと 零れ落ちそうなくらい

笑っているから 必死で思わず

あふれてくるものを こらえなきゃいけなかった

これっぽっちも知らないのに どうしてこんなに惹き寄せる

季節の移ろいを告げる風 優しく佇む光を包み込む

その風景はいつしか夢見たような世界そのもの

見つめてくれる 見守ってくれる

そのことが大きな勇気につながっていく

焼きつけておく 思い出に変えていく

季節の風が華やかな香りを添えてくれるから

その風景の中で 優しく佇むあなたは永遠になる

ささやかなほとばしる感情折衝

終わらない宇宙は始まりを求め

今日もあてもなく拡がる

なんか苦しいんだ

どうしてって

聞いてくれたら

君のせいをもって

言えたのにな

時事

世界は昨日もこんなに泣いていました

1人 リビングでコーヒーをすすりながら目を通す

相変わらずこんなにもひどいままで

良くも悪くも映像は気軽に教えてくれる

1人 リビングで蓄えていく

話のタネにでもなればと思いながら

世界は昨日も泣いていた

そして今日もまた泣くのだろう

1人 リビングで物思う

世界の中でどう映ってるのだろう

あんなにも泣いている場所があれば

こんなにも笑っている場所がある

あの場所から見れば

僕は笑っている場所にいるのだろう

でも僕自身は

その中間のような場所にいると感じている

だから時々

笑っている場所よりも

ずっと泣いている場所に

憧れに近いものを感じる

めくるめく巻き貝

殺されたこともないのに

「生」を軽はずみにしないで

「死」を迎え入れるなんて珍しくもないよ

終わらせるのは簡単さ

続けるのはつらいさ むずかしいさ

悪夢に等しいよ 時に

それでも私たちは回るの

回り回って魅せつけるの

未来に 将来世代に

そして踊るの

踊り狂って残していくの

未来に 将来世代を

途切れることはないわ

あなたがそこにいることが何よりの証拠よ

途切れかけても終わらないの

視線を交わすだけで

何かが弾けるような

奇跡が組み込まれているのよ

書き疲れるまで机に向かえ

血を吐くくらいのめり込むのだ

生暖かいサクセスストーリーじゃ
誰も手にとらねえぞ

理詰めのアクションじゃ
現場はうるさいぞ

一昔前の流行じゃ
主婦層は総スカンだぞ

サイクルをあてにするんじゃ
オリジナリティは滲まないぞ

いっぺんやってみろ

倒れるまで とことん

たぶん倒れねえよ

そう簡単には

振り向きながら

カッ飛ばすぞ

逃げ切ったつもりなのに
いつのまにか自分で鎖を繋いでた

空は今日

無邪気に雲と戯れ

いろいろな動物を描き

僕らに問いかける

“君たちは何を見せてくれるわけ？”

求められることを避けてきた歩み

ためらいがちに 太陽へ手をかざす

歩いてきたつもりなのに
いつのまにか同じ風景の中にいた

海は今日

無邪気に光と戯れ

いろいろな波動を描き

僕らに問いかける

"世界は捨てたもんじゃないだろ?"

求めることを押し殺してきた歩み

ためらいがちに 風の方へ帆を張る

ともすれば

ともすれば

声をかけ続けていれば

愛想程度に

1度くらいデートしてあげる

そんな目で見つめるから

妙にハリキってしまう

脇目も振らずの毎日

どうすれば その笑顔を引き出せるか

どうすれば心地良い程度にからかえるか

どうすれば嫉妬させられるか

どうすれば思わず振り向かずにいられないようにできるか

どうすれば少しムッとさせられるか

そして

どう最後に

どんでん返しを決めるか

そんなことをくだらないくらい真剣に考えていたんだよ

ともすれば

一緒にいる時間を重ねていけば

さり気なく

1度デートでもって誘える

そんな日が来るような予感がするから

妙にやさしくなっちゃうんです

脇目も振らずの毎日

どうすれば あの笑顔を引き出せるか

どうすれば 友達感覚を保てるのか

どうすれば 男友達と認識させられるのか

どうすれば 一歩踏み込めるのか

どうすれば 親友らしきニエちゃんと同格になれるのか

そして

どう最後に

サプライズ感を演出できるのか

そんなことをあきらめるくらい真剣に考えていたんだよ

単純な思考回路

引っ掻き回してさ

押し合わずに 立ち止まることを忘れずに

君のペースを掴めれば恐くはない

何一つ 迎えることさえも

希望には程遠い 生活感に充ちた日常

どこまでいこうか

夢は果てしなく

突き伸びていく

時に夢は 胸をしめつけ 焦がしていく

ふと見下ろすときめきが ちらほら

足跡にも滲んでいる

叶わないものを数えることが得意になっていく

それは時のいたずら

押し合わないでね

立ち止まることを忘れないでね

それぞれのペースを掴めるまでは

温かな眼差しで

優しいの

優しくないの

はっきりして

そんな態度じゃ伝わってこないの

好きなの

好きじゃないの

わかってる

もっとはっきりと示してほしいだけ

強いの 弱い

そんなことどうでもいいの

2択じゃくくれないよ

でもわかりやすく提示してくれないと

信じにくっていうわけ

え〜と う〜んと

そろそろ聞き飽きてきた

やるかやらないか やるかやられるか

そんなに単純じゃないって言いそうだけど

つきつめていけば案外そんなもんよ

お腹が痛くてしょうがない朝

いつも以上に笑顔で頑張る

心配をかけたくないから

あれこれのやりとりで

さらに痛くなりそうだから

私の笑顔はお腹の表情

たまにでいいから

勘づいてくれないかな

輝こう 君だけのために
輝こう 初めて自分以外のために
目的意識に誘われていく

永遠さえ描いてみせてあげたい
ありふれた今日さえも輝かせてみせたい

目覚めた深層心理

解き明かせなかった答え

いとも簡単に暴かれていく

過去数年分の思いを
重くなりすぎない程度に届けていく

そんな夢みたいな現実

トボケタふりして 欺くよ
物理的に接点がなくなってしまう日まで

輝こう 一緒に

輝こう できる限り

輝こう 2本だけが描き出せる日常がある

信じ込める今日の風景を小さくしまっておこう

そしていつか

そうだな一年後くらいに

いっしょにそっと引き出してみたりしよう

眺めてみた

改めて 後ろ姿

か弱さを感じさせていたのは無知でした

無意識に作り出される1つ1つ

紛れのないあなたの作品だったのですね

隠し通した感謝

音なき音に絡ませてゆく

穏やかな土曜の光る窓辺

こぼさないようにさりげなく

散らかったままのユメの部屋

色あせた夢

額縁に飾ったままのゆめ

しおれかけのユメ

吹きさらしの夢

いったいいくつ描いてきたんだろう

いったいどれくらい枯らしてきたんだろう

「いつまで残しておくの この部屋？」

たぶんどれかが実を結ぶまで

事あるごとに戻ってくるんだろうよ

時々 僕ら 憂鬱です
時々 僕等 裕福です

枯れることのない才能から飛び出すメロディー
少しでもそのエッセンスを掴みたくてなぞる日々

超える もしくは 対等に並ぶためには
1つでも多くの経験を積むしかないのかな

早くも想像力の源泉に見切りをつけ始めている

時々僕ら 勇敢です
時々僕等 愉快です

果たしきれない約束を交わしてはどうしよう
泣き付かれると断りきれずに尻拭い

時々 僕ら 友人です
時々 僕等 優人です

見つめてくれているの？

それとも勘違い？

ただ その席に

今日も居ると 思うだけで

何かいい事が起きる気がした

気にしないふりしながらも心は正直

揺れ動いて止まらないから苦しい

気づかれないように見つめると

想像以上に綺麗だから俯いた

いつまで見つめてくれるの？

ほんとはやっぱり気のせいかな？

階段を上り

いつものドアを開けると

今日もその席の近くで慌しくしている

そして今日も

長く見つめてくれた

覚えていない？

眩い日々の単調のすばらしさ

雨が降ってもケラケラ笑い合えば
どうってことなかった

あの頃には気づけなかったことが

今ならよくわかる

何もないことの強さ 何も知らないこそその弱さ

すべてがかけがえのないバランスで流れていたんだね

もう1度 味わいたいな

たとえ戻れたとしても

感じられないのだろう

だからこそ

あの頃の何気なさが訪れるように

笑顔でできる限り切り抜けている

絆を絶えず 絆を携え

絆を断たず 絆を抱えて

未来に過去の負を重ね合わせ
可能性の芽を必死で塞ぎこんでいるよ

切り変えてこう 遅すぎる今日からでも

抜け出してみよう ありきたりな明日でも

今日もそこには太陽
意義を求める間もないことをつきつける

1時間もすれば あんなにも移動している

回っているんだみんな 絆を絶やすことなく

絆は思わぬ場面で手を携えてくれるから

過去に未来のマイナスを押しつけ
試行も錯誤もしないまま

切り換えてこう 気づけた

遅すぎることはない証拠

抜け出してみよう このまま

新鮮さを逃さない手はない

穏やかに閉じていく姿で
惹きつけて見たいな 一瞬でいいから
最期に向かい盛り上がるセレモニーのように

儚くなくても 可愛くなくても
思わずギュッとしたくなっちゃう雰囲気

一体どこで身につけてきたの？

わからないから 知りたい
知りたくなるから わからなくなる

悔しいよな 同い年だなんて
一年ずれていれば会うこともなかったかもしれないのに

うなだれてばかりだよ

想い出すたびに
見かけるたびに

似たようなことをくりかえしているよ

性懲りもなくね

たぶんこれから途切れる日まで

同じようによくかえしていくんだろうね

目覚まし代わりのお気に入りのメロディー

誘われるまま勢いよくブラインドを開ける

すると近所のおじいちゃんがスタイリッシュにランニング中

今日も1日駆け抜けなきゃ なんて思わされちゃう

細胞分裂を繰り返してるんだから

昨日までのいやな自分と嫌いな自分はもうここにはいない

高らかに言い聞かせ

あきらかにうぬぼれ

次から次へと生み出されては消えていく細胞の1つ1つ

ありえないくらいぶっ飛んだ可能性がくっついてるって知ってた？

根拠はないよ 深い知識もないよ

でも 信じる力は運命を越え

科学を張り倒し 現実を飛ばしちゃうんだよ

まずは可能性にあふれる今日の自分に

「おはよう」

君が目指す夢を側で見つめ続けさせてはくれないか？

言える訳がないから

そっけなく見送った

いつの日か会える日に

君くらい輝けていたらと そのとき

静かに誓った

あれからどれくらい経ったんだろう

メールも便りも途絶えた

変わったのかな？

僕の口から言いたかった言葉は もう響かない

君の口から聞いたかった言葉は もう届かない

泥だらけの宇宙

ジャングルジムと智慧比べ

僕はよく覚えているよ

ミルクの匂うあの頃を

カーテンの匂いがするキミのことも

ただ早く来て

私はいつも願っている

ただ隣にいさせて

私はどこでも願っている

ただ少しでも長くここにいて

私は四六時中考えている

2人でいつまでいられるのか

2人だけでどこまでいけるのか

2人であと何日過ごせるのか

2人であと何年過ごせるのか

2人であと何ヶ月過ごせるのか

そのときが来て

切り出すのはどっちなのか

そのときが来て

きっかけを生むのはどっちなのか

私はただ願っている

ただいつも願っているだけ

ベッドで眠ろうとする手前に静かに祈るだけ

どこに旅行しても
本当に欲しいものが落ちているわけではなく

塞ぎこみ 頭を抱える姿
心のどこかが囁くように求める

夜空を見上げると
星は無邪気にゆれる

私のちっぽけさも 誰かから見れば
あんな風に輝いているのかな

どうして そんなにきれいななの？

どうして そんなに儂げなの？

振り向いてよ 目と目を合わせてみたい

自信が何一つない弱虫にも勇気をくれた

その美しさに感謝しなきゃと思っているよ

導くことはできないけれど

手を引いてゆくことはできるから

温かい目で 側で

いつまでも

見守ってもらうわけにはいかないでしょうか？

もう少しロマンチックな形容ができればいいんだけど

僕にいえるのはこれぐらい

あとは どう受けとってくれるかだけだよ

またね

その笑顔があまりにも切なさであふれていたのは気のせいかな？

あのとき 引き止めていたら 違った笑顔で応えてくれたのかな

灯火が呼び覚ます情景は淡い色でまとめられていて
思いのままに吹き消してみたくもなるけれど

抛り所はそこにしかないから できるはずがない

曖昧なまま 知られないまま ひっそりと消えて生きたい

水筆で描いたような部屋にありのままを残しておくから

ああなりたい こうなりたい

言うだけ言って

次には

ムリだから 今さらって

さんざん呟くのって何だかカッコ悪い

だからもう言わない

ムリでも今さらでも

ああいう風な感じに

こういう風な感じに

近づこうとすることにするんだ

昔付き合っていた彼女がふいに見せた そのような

未来の自分がたぶん直面する そのような

自分自身で体験したことがなくせに

目の前にいる女の子の気持ちがよくわかる

不思議な瞬間がある

共有することもできる

1人ではいられない

2人でしかいられない

1人だと死ぬわけではない

2人だと生きていけるわけではない

「時間がないんです」

そうとは思えないんです

「時間が足りないんです」

そうとは思えませんね

あなたじゃない私に言い切られても納得できないでしょうけれど

残念ながらやっぱりそうとは思いません

「時間がない」って常套手段じゃありません？

挨拶代わりになっていませんか？

時間に縛られず弄ばれる私だから言っちゃいます

決めつけます そっちが決めつけてかかってくるから

時間はあります

「そうとは思えないんです」

時間はあふれてます

「そうとは思えませんね」

素直に皮肉し合える仲だからこそ

共有しない価値観もある

今日のところはそんなところで抑えときましょ

「時間がないんです」

時間はあふれています

時間はあります

「時間が足りないんです」

探し疲れたのか

探す前から疲れているのか

自覚しているのは今考えている本人

「打破」 「飛翔」

ニューロンにせんにて飲ませるとしますか

日曜の午後2時過ぎ

ショッピングセンターの帰り

空しさと切なさが溢れてくる後部座席

たまりにたまった宿題に見向きもせず

友達からの誘いを強く拒む

始めなきゃ ぼくにしかできないこと

何かないかなあ

何かないかなあ

ブラインドから夕陽が射し込み

星がちらつき始める

先週と変わらない日曜日がまた終わろうとする

人生はどこまでも終わりなき迷路

束の間の休息もいつかへの罨

爆弾が降り

突然キスされる日もあるでしょう

そんな刺激的なエピソードとは

程遠い 一見退屈な毎日がほとんどかもしれません

それでも歩くのです

玄関から外へ

町内から街へ

街から街へ

街から村へ

村から村へ

村から町へ

町から町へ

町から街へ

退屈な月曜と火曜のあとの水曜には

自分なりのサプライズ

自分なりのご褒美

励ましながら乗り切るのです

形成逆転狙いながらヒキコモル日々

蓄えは十分できた そろそろ飛び出してもいいんじゃないか

自分で錠を内側からかけてきた

太陽も雲も星も月も窓から眺めてきた

錠穴は既に錆びついていた

開けられない もう飛び出せない

開けられない

もう飛び出せない

どこかで呟いているのを蔑み

関係性を見出さず放置してきた

あなたじゃなく

自分なのに

あなたのことではなく

自分自身のことなのに

消化と伝達の営みの端に

必要とされたいと願う本音があちらこちら

アドバルーンのように浮かび漂う

視線が交差したら

すかさずダッシュ

できるだけ遠くへ

目立たないポジションへ

勘違いならまだしも

深く深く落ちる準備はまだ

心の底から強く儂く想い続けていた

今さら言えたところでキセキは起こらず

とまどわせるだけだろう

ならば名を馳せて

少しは過去に寄せてくれた想いに報いて生きたい

そう今さらの決意

関心を全く失っていたとしても

強く想い起こさせるほどの明確な成功を収めよう

軽く嫉妬を感じさせるくらいの衝撃をお届けしたい

悔し涙と嬉し涙が程よく混ざり合うくらいに

今こそ切り裂き 切り開いていこう

絡ませても擦り抜けていく運命 切なさが積もり積もる

味わい深いと割りきり

逆手に楽しみましょう

時間切れの運命が人生だ

暇になったと感じたら危機感を植えつけろ

「忙しい」がステータスだなんて勘違いはごめんだけど

「つまらない」と「暇」が口癖の日々は分解してやらないと

登りかけては急いで引き返す

気づけば

成功も失敗もあいまいなまま

足してはまた足していく

引くことに恐れ

引き際の意味を覚えることもないまま

おぼろげに吹き飛んできた風景

拾い上げると嘘みたいに

綺麗に微笑む笑みがあふれている

ふと振り向けば

今も変わらずやさしく

佇んでいてくれるような気配がした

それは日曜の夕方

喧騒から外れた

駅近くの喫茶店

前向きにすべてを許してゆこう

来るもの拒まずの姿勢が色々な景色につながっている

どうしても許せないことがあるとしても前向きに

後ろ向きに許せないとはなしで

暗がりの中で 自ら選んできたあの暗がりがもし...

そんな繰り返しやめて 戻れるはずないから

変えられないことにまみれても

変われるよ おしとやかに

気分が落ち込み 塞ぎこんでしまう日々のために

穏かな日には和やかな笑顔を振りまき

一日一善で情けは人のためならず

備えていこう

それでもすべてを許しきることはできないだろう

だからこそ多面的にそこらじゅうにタコのように触手を伸ばし

褒め合い 褒め殺し 実践しよう

どうにもこうにもならない

空虚を抱えながら

新世界を待ちわび

新世代を羨む

始まるのも

終わるのも

基点はここなのに

意識は欠けたまま

変化を呼び寄せる風

いつか巻き起こせたら

願うだけ願い

今日も眠りに着く

最悪から始まる日常って想像できる？

体験できなくても感じ取ってよ

あしたは苦痛以外の何物でもないんだ

今の僕にとって

解き放て

夢の奥底から今

今まで築いてきたすべてをここで

今まで感じてきたすべてを今すぐ

最後を迎えるまでには時間がありすぎるよ

片思いに片思い

戸惑いや沈黙を決め込む姿は憎らしいほど

桜が寄せる川辺で季節の祝福が弾けるシステムティック

狂おしいほどに愛しておりました

響かない言葉が胸を洗濯機みたく駆け巡り

夢の続きの代わりにTVのスイッチ

想像できないほど愛しておりました

私の勘違いでなければ

あのときの貴方は片思いなどではなく

両思いだったわけです

ただあのころの私には

故意の手順がよく理解できておりませんでした

集中しようとするほど

机のあちこちが気になりだす

関係のない本や漫画に思わず手が伸びる

僕は駄目人間さ

それでも構わないさ

飽きるまで他事で気持ちごまかして

少し後ろめたくなって

小さな後悔を積み重ねて

また戻ってくるんだ

期待はずれもいい所

さんざん振り回しといて

添えなくて

ほんとうごめん

とっくに忘れちゃってるかもしれないけど

オレは覚えているからさ

一応約束だから

思わずもう一度

会いたくなるような

奴になるからさ

永遠なんだね 想い続けることは

一瞬だね 焦がれ続けることも

最悪だね 無為に過ごす居間は

最高だね 言葉のいらないベンチは

夢はいつか消え果て

忘れた頃に形を変え

そっと鼓動とともに 胸の表面にやってくるのでしょう

古めかしく筆をとって

嫌ならシャーペンでも ボールペンでも

やりたいことがないなら

今のもやもやを書きなぐって

今の感情さえも あなただけの小説

偉そうなことばっか言ってごめんね

怖かったんだ

期待に応えられないことが

かもめが泣いて いる

潮騒が寂しそうに語る

夢なら僕等の存在は実物じゃないの

誰にもわからない

答えもいない

でも だからこそ

求めずにいられない

ゆりかもめが走って いる

喧騒が鮮やかに触れる

夢なら私達の存在は空想なのかしら

誰にもわからない

答えもいない

でも だからこそ

あがいてしまう

根源的になれば なるほど

真理とは何かが 見えなくなる

神様ヒントを 嘘でもいいから

かもめは仲間に泣いているのか

それとも海に 大地に

はたまた 呼吸の一部に過ぎないのだろうか

誰にもわからない 答えもいない

でも だからこそ

求めずにいられない

運命なんて 存在しないんだよ

誰か強く言ってほしかったよ

聞く耳はもたなかったかもしれないけど

努力しかないよ 一言

強く言ってくれればよかったんだ

親のせいにして

友達のせいにして

世間のせいにして

時代のせいにして

景気のせいにして

自分のせいにするかと思いきや

才能のせいにして

キリのないスパイラル

運命なんて これっぽちも存在しません

大なり小なり努力しかありません

努力の次に努力 努力 努力

そして ふと見渡せば

運命らしきもの

そのような流れになっております

騒音寸前でお伝えします

苦情件数に関わらず

運命ってスピリチュアルな響き

努力って汗臭い響き

この響きのニュアンスを入れ替えて

みせていただきたい

如何しようも無い

どうすることもできないまま

こうすることもできなくなり

ああすることもできなくなる

じゃあ

何ができなくなってなっているのか

聞かれると よくわからなくなる

どうしようもない

ほんとに

こうしようもなく

ああしようもなく

じゃあ

何がしょうもないのか

考えてみると　すぐに思いつかない

たくさんのソファーに囲まれた部屋で

見つめられていたいから

太陽の光を吸収できるくらいの窓でなくちゃね

ベッドよりも寝心地の良いソファーが欲しいな

意識朦朧だとしても

苦しみに悶えるとしても

見つめられていたいな

白いソファーで統一された 無垢な部屋で

想いがいつまでも枯れてしまわぬよう

そう言いながら見下していた

玄関の外に広がるすべてを

大切にしようとするほど

想いは枯れやすいものだよ

淡く色づいた花びらが

そっと 舞った

どこまで逃げても ごまかしきれない

本質は変わらない

憧れになりたくて 輝いているフリを通す

だけど空しさは 深みにはまる

どんな夢を描き どれだけの道をまたぐの？

1つずつ知りたくてしょうがなかった

気にしてばかりだった 関係はないのに

越えてみせる 目的も持たぬまま叫んでいた

輝いてみせる 自重もせずに誓い続けていた

勇ましい声は体内どまり 体裁は繕い続けた

久しぶりの集合写真に耽り 頼りない自分の姿に嫌気が差す

何一つ変われなかった 甘えたまま

どうにかこうにかして

次までには 胸を張れるように

慣れていなければ 固く危機感は躍り出る

いつか 皆は皆と割り切って接することができるように

自分は自分なんだと 言いきれるように

何かが壊れていく音を聴いていた

笑いながら 泣きながら 心の奥底で

誰かに気づいてほしくて

黙って 俯いて 沈んでいた

何かが擦れる音を聴いていた

とまどいながら 喜びながら 過去の蜃気楼で

誰かに会いに行きたくて

黙って 見上げて ベッドに沈んでいた

何かが弾ける音を聴いていた

気にしながら 済ましながら 未来の片隅で

誰かにあげたくて

黙って 閉じて 憧れに耽っていた

机がガタガタ震えだし

数年前に閉め直したばかりなのに

緩み 取れていく

壊れていく 音がする

懐かしい音を聴いている

壊れた夢でも

引っかかって

気になって

くすぶり続け

革命を起こしたい

思い起こしたのはデフレスパイラルの真っ只中

ありきたりすぎるかな

とんでもないことをやらなきゃ

何一つ変わらない

どんなに落ち込んでも

どんなに沈んでも

1つだけ 何か1つだけ

続けていける 人になりたい

描ききらないまま

放り出してきた夢らしきもの達

たぶんいつまでたってもこんな感じなんでしょう

時間切れの迷路 彷徨い続けている

僕には才能がある
そう思いながら無為に過ごしてきた

努力のひとつもせずに
特別なんだと言いついて聞かせてきた

やりきれない 自分が自分に失望していく

終わらない 自分が自分に絶望していく

とばしたり 刻んだり

引きずったり

何気ない坂道が急に険しく思えたり

似たり寄ったり繰り返していくんだね

閉じかけたり 弾けたり

ひっかかったり

何気ない帰り道が急に愛おしく思えたり

似たり寄ったり回っていくんだね

呼び寄せたのは理想じゃなく

現実は流れ

過去ははるか彼方へ

取り戻せないから切ないのか

届かないと知り始めたから空しいのか

掛け違えたのは現実じゃなく

夢は忘れ

未来は思った以上に早く

取り戻せないから切ないのか
届かないと知り始めたから空しいのか

ひび割れないからやりきれないのか

言葉は抽象的に絡回る

振り返ってばかりのどうしようもない日々でも

小さな積み重ねを怠らなければいつか光に慣れるよ

とんでもなく前向き

すべての前提には前向きがある

誰にも止められない

止めさせはしない

止めてしまう最終決定権は自分の中にある

ぐうたらに包まれた裁判官の持つような金槌

早いとこ捨ててしまえ 捨てきれないなら忘れろ

忘れられないなら気にすることをやめてしまえ

あきれくらい前向き

オーバーアクションがよく似合うくらい

どうしようもなく前向き

眩しそうに細める視線がふさわしくありたい

振り返ってばかりのどうしようもない日々に

満面の笑みで手をふる

過去の自分があっけにとられているのがよく見えた

目覚めた

はずの現実には

まだ 夢が立ち込めていた

窓から乗り出すと

大きな風に包まれ

「 生きているよ 」

改めて 確認できた

切ないくらい無力なままで

大きく包み込むはずだった未来 落ちていく

たくさんの笑顔に背を向けて
笑う資格すらないと決め込んで

とまどうくらい変わらないままで

小さく返すつもりだった過去 引きずっていく

たくさんの泣き顔をごまかして
泣く理由が見当たらないと呟いた

最後の笑みを 最後の姿を

大切に胸に秘めてる 今でも

ずっと眺めていることが照れくさくて
はっきりとは思い描けない輪郭

空は似たような色なのに

雲はそれじゃあ満足できないと言わんばかりに流れる

“ 空に溶け込んでみたい ”

休日の窓からいつまでも見上げていた

切なさは無力を優しく受け止めてくれた

朝と夜を迎えるたびに

大きく包み込むはずだった未来に慰められている

少し予定遅れの今

とまどいは平常を温かく見守ってくれた

上と下を繰り返すたびに

小さく振り返るつもりだった過去に勇気づけられている

少し軌道修正の今

静かな多面

そっと 今 あなただけを
そっと 今 抱きしめる

傷つけ合うことの
意味を確かめ合うように

そっと 今 あなただけに
そっと 今 伝えていく

走ってきました
空しささえ感じるくらい

そっと 今 あなただけを
そっと 今 見つめてる

寂しそうな顔を
していました

そっと 今 あなただけに
そっと 今 分かち合う

笑顔にしてあげたかったのに
あまりにも無力で

綺麗に咲き乱れよう
風に大きく揺れる
花びらの景色

そんなことは少しも
考えたことがないという顔で
向かい合ってきた

そっと 今 あなたと2人で
そっと 今 眺めてる

ただ過ちを正したかった
それだけのことが

やわらかな笑顔は

言葉にすると

木漏れ日の下で

真実味に乏しいから

眩しすぎる幸福

時間だけが

そっと 今君だけを

ただ積み重なっていくのを

そっと 今感じてる

待っていた

殺してしまいたかった

そのまま見送るくらいなら

すべてを壊してしまいたかった

この手で君のすべてを

律儀にも神妙な面持ちで切り出されたから

静かにうなづくことかしかできなかった

君のせいじゃない

じかんのせいじゃない

才能のせいじゃない

神経を満遍なく伝わるメッセージさえ素直に受け取れず

殺してやりたかった 選択肢はもうなかった

すべてを壊してやりたかった これから広がる先の世界を

それなのに
律儀に呼び出してきた

初めて出会った以来の
喫茶店に

静かにうなずき

微笑むしかなかった

理由をいくら並び立てても

約束を交わしても

もう無理だと

君のせいじゃない

じかんのせいじゃない

才能のせいじゃない

運命のせいじゃない

僕のせいでもない

切ないくらい感じているよ 幸せの真っ只中の映像を

そして 一人ニヤケたり 急にホロリとしたりしているんだ

あの頃は幸せだったなんて感じる隙も暇もなかった

今さら気づいているよ ありがちだけど

あらら どうして こんなにも苦しいのでしょうか

あらら どうして こんなにも切ないのでしょうか

あらら どうして こんなに簡単に迷い込んでしまうのでしょうか？

きっかけは様々

もっと もっと は誰もが思う不思議

ある人は言うのです

まるで病気にかかったみたいだと

また別のある人は言うのです

まるで魔法にかかったみたいだと

ゆっくりと貴方が手招きしてくれて 救われた

私の人生はあの時 動き出した

その期待に応えることを 生きがいにした

その想像を裏切ることが 何よりの喜びとなった

その意味を噛みしめる日々を迎えるのが

唯一の夢だった

「 友達だよね 」

あなたに言われるとは

思いもしなかった

「 やさしいね 」

あなたに言われると

信じてみたくなる

「 すごいね 」

あなたに言われると

ありがたみがある

できない

嘆いて

才能がない

決めつけて

逃げてきたんだね ずっと

飽きもせずと同じようなところをウロウロして

結果が現在だよ

可能性はあるんだ

時に太陽並みのスケールだ

夢見れば無限なんだ

まどろみの奥底に揺れた

一輪の造花

不気味だけれど　いつか僕にも創れるかな

そんなことを思ったあの時から12年経ちました

あまりにもよく泣くから何だか笑えてきたよ

そびえる涙が温かな指先 強く拒む

慣れてはいたが

重いときほど ふがいなさに打ちのめされる

囁くような導きも

優しいお節介も

何だか 物足りない

力強いお告げも

神々しいひらめきも

何だか 煩わしい

信じるものと信じぬものを分かつ時点で

たかだか知れている

どこまで行けば飛び立つ峠に辿り着けるか

いつまでも尋ねてばかりだ お天道様に

存在証明といえは嘆くことぐらいだ

空しくはないか

他人事のように問い詰めた

君のため お前のためなんだ

口実が欲しかっただけかもしれない

いたたまれない惨めに進んで耽る君はあまりにも

遠くへと誘ういつかの郷愁は

自分が見過ごしてきた

幾つもの好意を 夕日を引き連れ

憂えげに照らしている

たぶん現状に甘んじているのは紛れのない

何かがとてつもなく不釣合いに思えたから

飛ばしきれなくとも 進んで下敷きになってあげる

ガード下の密売交渉 ガード上のストレス凝縮電車

こなしきれなくとも 進んで身代わりになってあげる

ぺらぺらと単語帳をめくれば

あら不思議

ぺらぺらと言葉があふれてくるじゃございませんか

飛ばしきれないなら 凄然と散らかして頂戴

こなしきれないのなら 悠然と早退してくださいませ

空しく日々が絡回り続ける定めとしても

ああ どこまでも夢ならば

枯れ果てる時まで

壊れない 壊れない どれだけ限界を感じても

寂しさ手なずけ 過去の自分さえ彩っていく

逃げ切れないのなら 自ら突き進め

全ての敵を協力者に

途切れるはずがない

元気がないと

僕も元気でいちゃいけないのかと考える

無理して笑うことはないし　しゃべることもないから

ただ元気でいて　輝いていて

思わず嫉妬するぐらい

そうじゃないと僕はふがないことに駄目なんだ

寂しさで焦がれてみても

思いっきり涙に耽ってみても

心底 壊れることはないし できない僕らだから

何月何日したたり

涙を流すと

その一粒一粒に

何月何日の思い出が詰め込んであるんだからというように

手を添えてくれるから

うれしくて

涙はあふれるばかりで

凍える日

腕組みできる

きっかけの日

どうして気づかないふりするの

でも そのくせ

視線を頻繁に寄越してくれるのは何なの？

気にはかけてくれているんじゃないの？

黙っていないでたまには声でもかけてよ

ただずっと待っていたの　ただあなたの声を

曇りの日には 揺れ動く言葉を泳がせ

雨降りの日には 塞ぎ込みな言葉を溶かしている

飽きることなく

2人でいた頃と変わらない生活リズム

浮かべては流していたあの頃の夢たちを
つたない平泳ぎで必死で追いかけているんだよ

寂しげな空 虚ろげな群れ 黒い町

楽しんで上へ行きたかった

前も横も見ずに

下ばかり気にしていたよ

漂うのなら 声をかけてもらえるのかな

踊りだせば 風は巻き起こるのかな

すべては

自分の心に基因していると気づいてしまった

だから辛いんだ だから震えているんだ

漂いながら 踊りだせば

風は声を運んでくれるかな

踊りながら 漂うのなら

声は風をたしなめてくれるのかな

どうして気づかないふりするの

でも そのくせ

視線を頻繁に寄越してくれるのは何なの？

気にはかけてくれているんじゃないの？

黙っていないでたまには声でもかけてよ

ただずっと待っていたの　ただあなたの声を

晴れの日には　前向きな言葉を紡ぎ

曇りの日には　揺れ動く言葉を泳がせ

雨降りの日には　塞ぎ込みな言葉を溶かしている

飽きることなく

2人でいた頃と変わらない生活リズム

浮かべては流していたあの頃の夢たちを
つたない平泳ぎで必死で追いかけているんだよ

寂しげな空 虚ろげな群れ 黒い町

楽しんで上へ行きたかった

前も横も見ずに

下ばかり気にしていたよ

漂うのなら 声をかけてもらえるのかな

踊りだせば 風は巻き起こるのかな

すべては

自分の心に基因していると気づいてしまった

だから辛いんだ だから震えているんだ

漂いながら 踊りだせば

風は声を運んでくれるかな

踊りながら 漂うのなら

声は風をたしなめてくれるのかな

怯えずに

失敗してもいいから

ほら 手を挙げて

間違ってもいいから

君の声が

君の言葉が

スパイスになる

淡い感情にゆだねて君を導く

みたいな

艶めかしい情事を想起させるコロンで誘う

みたいな

せめてもう少し頼りがいのある男子だったなら

連れ去ってキスでもしてあげられたのにな

みたいな

鼓膜が破れるくらい繊細な言葉で酔わせたい

響くように 心の一部を抉り取るくらいのインパクト

えがき続ければ

いつかきっと 気づいてくれるような

筆はないけれど

かなで続ければ どこかでふと 気づいてくれるような

楽器は弾けないけど

波の音がバスに乗り

バス停から風にのりホームへ

午後三時過ぎの穏やかな電車につながっていく

やがては山を越え ぼくの住む村に

理屈では説明できないような感覚が生まれる

包囲網はぼくの才能を育む

大きなきっかけ

爆発するくらいのキスで今日だけは私の色に染めたい

振り返ってばかりの私に出来ることといえば
嫌われないくらいの距離感でカラフルをあげることに

後悔ばかりの私にも 可能性を気づかせてくれたあなただから

とびきり幸せにしてあげたい

心の底から想っているんだよ

だから今日だけは

私の色に染め上げさせてくれないか？

ちょっとくらい沈んだ夜
思い出してくれないかい ぼくのこと

なにもかもがうまくいきそうな予感をあげられるわけではないけれど
何か少しでもうまい方向に進むような可能性を感じさせるから

ちょっと暗い沈んだ夜は数えきれない
思い出すゆとりもないまま眠ってしまうかもしれない

それならそれでいい
想像以上に眠りは癒しにつながっているから

ちょっとくらい沈んだ方がいい夜もある
考えあぐねることで生まれるものがあるから

眠れないなら無理に眠ろうとしなくてもいいよ
寝ても覚めても世間はちゃんと回っているから

三分の一は眠りに支配されている人生さ

どんなに今眠れないとしても
帳尻はちゃんと合わされるものだよ そのうち

ちょっと暗い沈んだ夜
考えてくれないかい せかいのこと

新聞やニュースの先に広がる現実を

想像してみるだけでいいから

ちょっとくらい沈んだ日には夜まで待っていて
軽い気持ちで後はゆだねてよ

「 こんばんは 」

それが僕らの一日を告げる名刺代わりの挨拶

旅へ出よう 今すぐに

準備を早くしておいで

目的地を決め 今すぐに

やることやりたいこと

着いたら考えればいいさ

終点までもいいだろう

乗ったことのないのでも悪くないな

近場でもいいよ

見たことのない土地へ出かけよう

こんなに晴れているんだ

そうそうないよ こんなにいい日

大切なものは

失くす前から

大切だと気づいている

ただ 照れ臭ささが被さっているだけ

消えてしまう

その前に

慌てふためくだけ

消えてしまったから

改めて大切だったと気づくだけ

優しく 強く

手を差し出してあげる

赤の他人だからこそ できることがある

言い聞かせる言葉は

刻み込むうちに 使命の色を帯びてくる

優しく 強く

手を差し伸べてあげる

一度きりの関係だからこそ できることがある

突然の夢へのパスポート

あれほどシンデレラに憧れていたぼくなのに

断る理由しか思い浮かばなくて泣けてきた

何一つないのに積み上げていくことなんかできない

もっともらしい抽象論は 空しさを掻き立てる

今は 今のまま

あれはあれのまま

飲みかけは 飲みかけのまま

食べかけは食べかけのまま

これは これのまま

僕は僕のまま

それは それのまま

男子は男子のまま

女子は 女子のまま

君は 君のまま

フィーリングでごまかし

朝ばかり迎え

順序だてて告げられていたら

即行で即決していたのかな

いや たぶん周到な理由を築いていただけだろう

ふざけすぎて

羽目を外しまくり

特別にいいことなんてなくても

集まればそれなりに盛り上がるよね

時間なんてどうでもよくなって

ただ あの頃を振り返るだけで

つながり逢えるんだ

どんなにあがいてみたところで

届きはしないって思い込んで悩んじゃってる

頼杖する3限

よく似ていて

おかしくて

生きている証拠
それは僕にとっての

生きている証拠
それは何気ないものかな

生きている証拠
それは私にとっての地下鉄

生きている証拠
毎朝通勤でお世話になっている

生きている証拠
それは彼にとっての車

生きている証拠
休日のドライブにかかせない

生きている証拠

それは彼女にとってのアルペジオ

生きている証拠

放課後に解き放つ世界観

生きている証拠

それは俺にとっての

生きている証拠

明度と彩度を増してくれる存在

生きている証拠

それは何気ない日常

生きている証拠

振り返ると見えてくるもの

いつか通りたいな

そのラインをなぞりながら

響かせるよ その日

その心をあの頃の海に連れて行ってあげる

泣いてみたり

咲いてみたり

着てみたり

飛んでみたり

眺めてみたり

食べてみたり

怒ってみたり

転んでみたり

引いてみたり

繰り返してみたり

思い出してみたり

悩んでみたり

殺してみたり

生かしてみたり

放置してみたり

新しい日々がすぐそこで待っている

高鳴りと不安の狭間をゆったりゆらり

空を越えて +
夢を添えて +

海を越えに
月へ揺れに

呼んでいるよ
求めているよ

気づかないだけさ
疑いを捨てきれないだけさ

飛びたいのなら

羽ばたけばいい

泳ぎたいのなら

飛び込めばいい

明確な目標がないと動きにくいよね

臆病の本音とも知らず

苦笑いで済ませる

したくなければ

しなればいいの

笑いたいのなら

笑えばいいの

笑いたくないのなら

笑わなくていいの

本能を押さえ込めば 建前として美しい

そんなに簡単に自己完結しないでよ

風の吹かない散歩は居心地悪くて 何だか不思議

呼んでいるよ 思い込みが足りないだけさ
求めているよ どこかできっと

風が吹く
夢が舞う

はるばるやってくる
はるばる迎えに来る

ようこそ お待ちしていました

風が吹く

少しずつ

花が舞う

落ち着く

星が降る

ゆっくり

蜂が飛ぶ

素直に

風が吹く少し

少しずつ舞い落ち

落ち着いていく

雨が降るゆっくり

ゆっくりと飛び始め

初めて素直になっていく

空が降る

海が飛ぶ

はるばる広がる

ようこそ お待ちしていました

というよりも

本当は待ちに待っていました

君の撮る風景がぼくの癒しになる

そんなロマンチック ともすればキザな一言

言えるわけないけれど

いつのまにか
入学式と卒業式 一気に味わった気分だ

とまどいと切なさで壊れちゃいそうさ

君の向かうところはたちまちに
アーティスティックな味わいを醸し出す

それは感性と才能と調和の賜物

心の浅いところで爪かじりながら眺めてきた

頼むよ ぜいたくは言わないから

俺にも分けてくれよ

アスファルトだろうがあぜ道だろうが

君が佇めば

風さえも涼しげになまめかしくなる

努力へひた走る姿も込み

君自身が作品となっていく不条理

泣きはらした情熱はあの日焦がした記憶

しとすと雨にぬれた記憶は青春群像劇の夕焼け

夢の奥深くに佇む影 探し続けた歴史の転換点
積み重ねられていく事実を真実とは感じられない思春期

おぼつかないのは自信が欠けてしまっているから

手元の腕時計はコンパスのように針を反応させた

天使の足跡を照らす神々しい星明りを頼りに

歳月の積み重ねは 経験の積み重ねと比例せず
力任せでねじ伏せてきた現実には限界知らず

根源的な美しさが朽ち果てていくのを見届けていた
静かな午後に渦巻く積乱雲の下で

飛び降りるのではなく舞い降りるかのように逝った

台風一過の再生された霧囲気に包まれて

切り売りされていく日常風景

ありふれた人生設計図がよくお似合い

食べ尽くしきれない飽食社会

罪滅ぼしにもならないODAがよくお似合い

かよわせた

夕方から夜にかけての空気の中で

何にもなれていないと気づかされた

気づいた

一生 目にする事のないミサイルを操りつつ

時刻 現実版を目にする

眺めていた 反抗期の塾帰り 家電ショップのプラズマで

沈黙がしばし流れた

現実だと言いきれるかどうか

わからなくなった

デカルトの言葉が頭に染みこんだ

映画のワンシーンのようで

恐怖よりも好奇心が芽生えた

世界はかわってしまった

誰もがそう捉えようとした

半年後くらい

ワイドショーで白樺がインタビューに答えていた

「 何一つ変わってないわ、世界は 」 と

字幕はそのように歪んでいたようだった

凍えそうな顔して笑っていた日のこと
昨日のようにゆらめくこの記憶
苦々しいと 自分 でもよくおもう

代わらない風景の中
かけがえのない色で遊んでいた
戻れなくなることを知ってた あのころから深く

時間 がない

夢 がない

とりあえず T V をつけ

ラジオ をつけ

オーディオ をつけ

ネット をつける

「 退屈でしかたがない 」 と

笑顔でジャンクフードを食べている

詩を読む

穏やかな

顔をした 人が書いた

と言われている詩を読む

落ちていく

どこまでも高く

落ちていく

どこまでも潔く

一秒が狂おしいほど愛しい

焦り戸惑うことで単純な現実運命が宿されていく

落ち着いていく どこまでも忙しなく
落ち着いていく どこまでも駆け足で

一瞬を生かすか殺すか

その問いを腕時計にかざす

すると

針が ガラス を打ち破り

整然と

弧

を描いた

終わることの意味も知らぬまま

落ちていく

落ち着いたまま

落ち着いていく

落ちてゆきながら

颯爽お見舞い

「声が聞きたい」

その一言がハンドルを強く握らせる

季節は早くも 春 めき始め

人々はコートを片手に軽やかな足取り

馴染みのオープンカフェ

ぽかぽか陽気に誘われた笑顔があふれ

外資系CDショップからインスタライブの 春 らしいメロディー

君のくれた外車をまたぎ 入院する病院へ

幸せを肌で感じ取る 風はまだまだ冷たくとも

街路樹の木々はまだまだ寒そう

それなのに空気は 初夏 を思わせるほど

不快にさせないくらいのエンジン音でたくさんの視線を集める

重みにかけるえんじの車体 冬の終わりに よく似合う

セレクトショップのショーウィンドーに映る
自分眺めるスクランブル交差点

声を届ける

ほんとにそれだけでいいのか

気を遣うと無性に嫌がるから

向かうときはどこか手持ち無沙汰

久しぶりのお見舞い

はじめてのお使いのようときめいている

展望と回顧の楼

目前に控えた前わけもなく 身 をよじり
こらえてきた感情が駆け巡る

あれから さほど変われなかった

あれから どれほどかわったんだろう きみは

自信のないまま迎える節目は
不安 と ときめき が好き勝手

思い浮かべては 掻き消して
立ち止まってばかりいた道のり

輝く眩い何かを身につけ
胸を張って 会うのが理想

でも 現実はそんなに出来すぎた
お話どおりにはいかないみたい

よくも悪くも

あの頃

のまま明日を迎える

変に不安定極まりない鼓動はあの日とよく似ている

まるで昨日のことみたいだ

信じられないよ

いつのまにか

どうしようもないくらい
待ち焦がれてきたのに

迎えてみるとあっけないもんだよ

そうだなあ

少しは気さくになれたと思うよ

あの頃よりは

少しは自身らしきものをつけてはこぼしてきたよ

でも

やっぱり悔しいなあ

決定打らしきものを微かでも掴みかけてここに来たかったな

ちょっぴり珍しいエピソードも積み上げてきたけど

継続できていないのがなんかなあ

ふがないなあ

でも

だからこそ

この日があるのかもなあ

振り返るために
意図的に比べさせるために

まあ 何を言っても巻き戻しは利かないしな

だからこそ

これからはもっと

必死になろう

っていう気にもなるのかもな

最大限存在感

ただ

そこに君がいてくれるだけで

僕の周りは鮮やかに踊り出す

今日一日に目にするものが すべていとおしく思える

魔法のようなおまじないをかけてくれる君という存在

ただ　　そこにいてくれること

それは　かけがえのないこと

甘えさせてよ　　とことん甘えさせてよ

その分 きちんと甘えてよ

思う存分 甘えてよ

なくなるのか消えてしまうのか

ほんとうのところは当事者にならないとわからないけれど

それまでに精一杯甘えてよ

甘えていいんだよ

愛想つかされるくらい

この国の90%の人に見切りをつけられるくらい

甘えられるだけ甘えてからにしよう

会いたい人に会って

行きたいところに行って

食べたいもの食べて

飲みたいもの飲んで

眺めたい風景眺めて

撮っておきたいもの撮って

書きたいこと書いて

聞きたい音聞いて

読みたい本読んで

触れたいもの触れて

最大限甘えてから

また悩めばいいよ

焦がれ果じめたのは奇跡の季節から数年後
遅すぎた狂気な未来航路
ぶれることを知らない手元の見慣れた後悔図

破り捨てても心は心のまま
長く張り巡らされた指示達は程よく夢見心地で
非の打ち所のないほど現実的で

言い訳の作り方は今もあの頃も相変わらず

変わらないから

変われないままで

それでも正面から見つめることは出来なくて

歩むことだけ忘れずに 伏目がちなままでいいから
わき道しながらでも行けるまで行けるとこまで

弱気でも強気でもない わし はいつだって第三者間隔
持ち味だって言い聞かせて 傍観者を決め込んで

少し見下されたような居場所で
達観を少しずつ醸し出せるように溜め込んで

それが 僕 って人生

それが 私 って性分

それが 俺 って人格

誰がなんと言おうと語るの
間違っても語ってくれるのは
自己
自身

知っていても知らない振りして
割とそれがうまくて

聞き上手といわれて謙遜しながら
本音ではエスカレーターの上から一気に飛び降りたいくらいイイ気になりやすくて

何も出来なくても何でもできそうなふりして

割とそれが下手くそなのに

性懲りもなく見栄はいつでも超新星爆発級で

また

そんな 自ら に嫌気を刺しながら笑いをこらえていて

それが今のところの

自分

って歴史

それがこれまでの

自分自身

って存在

愛の色と声

そよぎたつ奇跡に重ね
知ることのない映像を分かち合えた夢

僕の色はどこにいったのかな？ 独特な色彩は滲んでいるかい？

届くように今でも描いているよ

相変わらずあの町で孤独を気取ってる

狂おしいほどに色濃く迫る過去たちを拭えないまま
色鮮やかな世界に溺れていく日々

もう 誰にも惹かれることはないよ

どんなやつと一緒にいるのかな

どうしてだろう？

こんな言葉さえ呟けない強がりな弱虫

いつからだろう？

たぶん生まれたときから

どうして素っ気ないの？

興味はあるのに素直にしないことに慣れすぎている

紛れのない想いだった

たぶん

これからも途切れることなく

駆け抜けていて

たくさんの夢を見送ってきました

まだ乗るには早いだとか
もう乗るには遅いだとか

そんなことを呟きながら

怖い　　苦い　　夢の途中

ありえない景色があふれてくる
それはいつか憧れた未来に良く似ている

綺麗なまま

透明なまま

いつまでもいられるんなら

努力なんて存在しないよ よく分かっているでしょ

手を挙げれば駆けつけてくれる
声を挙げれば振り向いてくれる

何人かは
何人かは

ゆったりと どっしりと

それぞれ 存在している

ゆっくりと忙しなさ 行ったり来たり

そろりと忍び寄るの影ばかりじゃないよ
光るものだって訪れるときは何気ない

抽象論でごまかしてばかり
理詰めで満足してばかり

誰も考えていない

とりあえずで乗り切っていく

無理だって 届かないって

言い訳ばかり

此処にいるなら 0じゃないよ

意義はなくてもいいじゃない

行こう

夢 も 現実 も 持ち合せないまま

下手くそな口笛で のほほんを決め込んで

飛び込んでいこう 動くだけで価値はある

理想とは名ばかりの政策スローガン
広告とは名ばかりのキャッチコピー

俗世間に染められていく身体を奮い立たせ
情報に縛られていく思考を解き放つ

駆けずり回ろう

醜くても 必死さは伝わるよ

カッコ悪くても

真剣みがあれば説得力も生まれる

漂い続けていて

途絶えないように

彼方が輝いている限り

悲しいことばかり 目をそらしたくもなるけれど

その瞳でしっかりと見据えていてください

関心はなくとも 最低限の興味を抱きながら

いつかきっとすべてがクリアになる わけではないけれど

願いは途絶えないから

祈りは受け継がれていきます

大いに輝いてください

あなたらしさをつかめるまで

輝いていてください

「 生 」 という大きく棚引く旗の下で

目標だけとは言わず

大草原に広がるような夢も描き続けてください

その姿に惹かれる人もいますでしょう

その姿勢に憧れる人も生まれてくるでしょう

せっかく生きているんですから

輝いてください

想像は無限で

時に空しさを覚えるかもしれません

しかし

時に想像は思わぬ形で現実と手を結びます

強く握り合うのか 触れる程度に握り合うのか

どちらかはその時までわかりません

これだけは忘れないでください

想像は思い浮かべたときから現実との折り合いを探してくれています

あなたが輝いている限り

心地次第

ひたむきに走る姿は胸を撃つね

僕にも可能性が眠っているんじゃないか

考えさせてくれる

すばらしいよ

澄みやかに晴れ渡る空のように

自由自在な生き様を示したい

魅せつけない

その姿はいったいどれほどの人に影響を与えるんだろう

明日にでも飛び降りようとしていた少年少女を踏みとどませるのかも

今日という日を絶望の幕開けと捉えていた人に一筋の光を捧げるのかも

単調で欠伸ばばかりしていた人にとっての特大な目覚ましとなるのかも

それぞれが

それぞれに

眠っている鼓動に気づく

それぞれが

それぞれには

まだまだ

なにかが隠されているんじゃないかと再び信じ始める

すばらしいよ

気持ちひとつで澄みやかに広がる空にだってなれるんだから

色んなカーネーション

光を集め

永遠を感じ

空を裏切る

扉を開けると色んなカーネーションが迎えてくれた

幻想のような現実がはっきりと浮かび始め

ふと 寄せられる眼差しに奢り続けてきた

現実の中で幻想のように佇むことを良しとし

気がつけば はがし損ねたプライドにまみれ

淡い幻想観は現実逃避以外の何ものでもない

光が散り

永遠が霞み

空が踊る

扉を開けると色とりどりのカーネーションが吹いている

遠い未来のある日に見るような

遠い過去のかなたで見たことがあるような

おぼろげな記憶にぶら下がる風景はあらゆる色彩で満ちている

経験の有無もはっきりしない扉の前で

「 もう一度 」 と願う

オレンジード海浜公園

超えていった羽ばたき

掴もうとした 夕焼け防波堤沿い

カップルが目を細め

きらめく海に向け笑い

さざめく波にささやく

学校帰りの小学生がジャグリングおじさんと戯れている

竿が整然とお辞儀

持ち主たちは少し早めの夕食中

清涼飲料のCMのように高校生が大きな向日葵を振りまき2人乗り

移ろいゆく輝き

向こう岸へと歩む小船を淡く照らす

マウンテンバイクを隔て 並んで歩いている

夕日に染まる横顔

横目で精一杯

ハンドルを握る手はどうしようもないくらい汗ばむ

的外れの話ばかりなのに はにかみながら続けてくれる

信じられないくらい穏やかな風景

ここに居ることの奇跡

その奇跡

呼び寄せたあの日の勇気

夢のようなお話

演じさせてもらえたあの春の夕暮れ

あとがき

この詩集をダウンロードしていただき、ありがとうございます。

何か心に残る作品はあったでしょうか？

詩のブログの「Orange Out」と「Autumn Aid」の中で、傑作評価を頂いた154編の詩。

この詩集には「歌詞のような詩」を明確に意識したブログ中期のエッセンスが詰まっています。

これをきっかけに、詩のブログ「橙に包まれた浅い青」 (<http://komasen333.blog.jp/>) に興味を持っていただけたら幸いです。

これからも電子詩集やブログで

1人でも多くの方に響く詩を模索しながら、良質な作品を綴っていきたいと思います。

この詩集をダウンロードしていただき、本当にありがとうございました。

読んでくださったあなたに、幸せの種が訪れますように。

【 橙に包まれた浅い青 】

<http://komasen333.blog.jp/>

【 電子書籍 】

<http://p.booklog.jp/users/komasen333>

【 現代詩フォーラム 】

<http://po-m.com/forum/myframe.php?hid=6982>

【 無限な無心な無色なシャイニング・ブライトリー 】

<http://blog.livedoor.jp/sakowha333/>

【 なんちゃって自己啓発の詩想 ～ ポジティブ ポエトリー ポッシブル ～ 】

<http://positivepoetrypossible.blog.jp/>

【 Life Love Laugh ～変わる心は恋のせいに 変わらぬ心は愛のおかげに】

<http://lifelovelaugh.blog.jp/>

【 エンプティ エン エターニティ 】

<http://komasen333.hatenablog.com/>

【 photo photo photo 】

<http://photo3.blog.jp/>

【 禁カフェイン→脱カフェイン→減カフェインに下方修正 】

<http://nocoffee.blog.shinobi.jp/>

【 YouTube 】

<http://www.youtube.com/user/komasen333/videos>

【 SUZURI-オリジナルグッズ 】

<https://suzuri.jp/komasen333/products>

【 レポート・論文 】

http://www.happycampus.co.jp/docs/983431505701@hc05/?docs_num=&m=2&v=&t=&e=&a=list_bar

【 Twitter 】

<https://twitter.com/komasen333>

【 note 】

<https://note.mu/komasen333>

【 VALU 】

<https://valu.is/komasen333>

[Gridge]

<https://gridge.com/komasen333>

154 Orange Autumn

<http://p.booklog.jp/book/31684>

著者 : komasen333

【 詩のブログ 】

橙に包まれた浅い青 <http://blogs.yahoo.co.jp/komasen333>

【 お問い合わせ 】

comasen2003-333@yahoo.co.jp

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31684>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31684>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.